

技術室
資料

カンボディアの地理

昭和43年11月

海外技術協力事業所

JICA LIBRARY



1048182[8]

| | |
|---------------------|-----|
| 国際協力事業団 | |
| 受入 月日 '84. 3. 19 | 109 |
| 登録No. 01000 | 19 |
| | KH |

あ い さ つ

海外技術協力事業団は、海外に派遣される専門家等の参考資料の整備に鋭意努力を重ねておりますが、今回その一環としてカンボディアの自然環境を知る上で恐らくは唯一の文献である「*Geographie du Cambodge*」(Tan Kim Huon著)を翻訳刊行するはこびとなりました。

わが国は従来よりカンボディア国に対する技術協力を力を注ぎ、既に120名余の専門家・協力隊員が派遣されておりますが、今後も更に数多くが派遣されることと思えます。

本書は原著者の豊富な学識と経験をもとに、カンボディアの地勢・気候・水文・民族・産業等について広く紹介したものでありまして、技術協力関係者にとって示唆に豊む有益な資料と考えられます。

本書の入手・翻訳にあたっては原著者と親交のある前メコン委員会職員河合恒氏に御尽力いただきました。河合氏はインドシナ半島の一般事情に精通され、現在JETRO職員として御活躍中であります。

ここにその労に対し深謝するとともに、本書が技術協力を携わる各位に広く活用されることを心から希望いたします。

海外技術協力事業団
総務部長 田中秀穂

訳 者 の こ と ば

Tan Kim Huon 林野庁長官の著書、Geographie du Cambodge, 1963 は長官が1967年8月日本で開催された太平洋学術会議に主席代表として来朝された折、私に恵贈されたものであります。カンボディアの地理について組織的にかつ広汎に記述してあり、カンボディアの水文、地理、人文についてみごとに整理されてあります。

ここに非才を省ず訳出しましたがカンボディアの農業開発問題並びにアジア農業に関係ある各位に御参考に供し得たら幸と思うものであります。

昭和43年11月1日

河 合 恒

原 著 者 略 歴

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1924年 | バトタンバン(BATTAMBANG)に生る |
| 1945年 | ハノイ大学・理学部卒業 |
| 1950年 | パリ大学・農学部卒業 |
| 1953年 | ナンシー農科大学・熱帯林業科卒業 |
| 1952年 | 農務省林野局技師 |
| 1961年 | 計画省企業局審査官 |
| 1963年 | 農務省林野庁次長 |
| 1964年 | 農務省林野庁長官(現在) |

目 次

| | | |
|--------|---------------|----|
| 第 1 章 | 地 勢 | 1 |
| 第 2 章 | 気 候 | 8 |
| 第 3 章 | 水 文 | 12 |
| 第 4 章 | 海と海岸 | 20 |
| 第 5 章 | 土 壌と動植物 | 24 |
| 第 6 章 | 住 民 | 28 |
| 第 7 章 | 諸民族 | 32 |
| 第 8 章 | 人 口 | 37 |
| 第 9 章 | 生活様式 | 43 |
| 第 10 章 | 政治と行政機構 | 51 |
| 第 11 章 | 農 業 | 55 |
| 第 12 章 | 天然資源 | 61 |
| 第 13 章 | 工 業 | 65 |
| 第 14 章 | 交 通 路 | 71 |
| 第 15 章 | 貿 易 | 77 |
| 第 16 章 | 参 考 文 献 | 81 |

付 カンボディア地図

第 1 章 地 勢

カンボディアは、モンスーン・アジアの一部である。北緯 10° から 15° 、東経 102° から 108° にまたがっている。カンボディアは熱帯圏にある。

面積は18万1千平方Kmで、中国(その $\frac{1}{54}$)、インド($\frac{1}{18}$)、インドネシア($\frac{1}{10}$)よりはるかに小さく、またビルマの $\frac{1}{2}$ 、タイの $\frac{1}{3}$ 、ベトナムの $\frac{1}{2}$ に相当する。ラオスよりはわずかに小さい。もともとマラヤ連邦、ネパール、セイロン並びにスイス、ベルギーといった国々よりは大きい。

カンボディアは、コンボントム(Kompong Thom)を中心とする、ほぼ正しい多角形をなしている。すなわち、東・西・南・北へのひろがり、ほぼ等しい。最大長と最大巾はそれぞれおよそ560Kmと440Kmである。まったくの僻地といえるところはない。

北はタイ、ラオスに、東はベトナムに、南はベトナムとタイ湾に、西はタイに、それぞれ境を接している。国境線は2,600Kmに達し、その $\frac{5}{6}$ は陸上にある。

カンボディアは平野が卓越した国である。一般に高低差が小さい国である。山地の存在も交通の妨げにはなっていない。そのほとんどが洪水の影響をうける中央平原は南西へと拡がり、北東部からタイの平野につながる。

カンボディアの最高峯はPhnom Aural(1,813m)で、コンボンスブウ(Kompong Speu)州にある。

地勢からいって、カンボディアは大きく5地区に分けられよう。すなわち Kravanh 山脈、丘陵地帯、中央平野、北部高地帯、国境のある高原縁辺地区である。

1 Kravanh 山脈

Kravanh 山脈(カルダモウム山脈)は、タイの Chantaboun の北からカンボット(Kampot)まで、ほぼ北西-南東方向に走っている。基盤は花崗岩で、厚い砂岩層がこれを覆っている。

高原は風化で、けわしい断崖をもった山岳にきざまれた。こうした山をPhnom

と呼ぶ。

カンボディア最高峯はこの山脈にある。Phnom Aural である。

ほとんど開発もされていない、進入を許さない厚い森林で覆われた地域で、人口も稀薄である。ペアル (Pear) やサオック (Saoch) といった山岳民族たちの住むところである。

かつて交通路のほとんどなかったこの地域を拓くものは、Kravanh 道路の建設であろう。

Kravanh 山脈は北から南にかけて、つぎの三つにはっきりと区分される。

1) 西 部

バイリン (Pailin) からブルサット (Pursat) 川までをいう。大褶曲地帯にあって、結晶岩、砂質片岩がみられる。

主要な山岳は Phnom Sar Pouk (839 m)、Phnom Tadeth (1,114 m)、Phnom Tuk Pril (1,123 m)、Phnom Mous (1,337 m)、Phnom Thom (1,258 m)、Phnom Khmoch (1,425 m) およびこの地域の最高峯 Phnom Tumpor (1,563 m) である。

2) 中 部

Maung から コッコン (Kas Kong) に至る線に沿ったゆるいたわみ状の山岳群である。

この線の西には高さ 1,744 m の Phnom Samkos があり、タイ湾を見下している。東には、しばしば標高 1,000 m を越える、Phnom Pan (1,400 m)、Phnom Bakane (1,220 m)、Phnom Khnang Trapeang (1,172 m) などを含む山塊が広がっている。

3) 東 部

この地域はかなり独立した 3 つの山群からなっている。

① Khchol 山塊はブルサット—コンボンスブウ間にあって、コンボンチュナン (Kompong Chhnang) の西にそびえている。カンボジア最高峯の Phnom Aural は、この山塊にある。

② Sre Umbell とコンボンスブウの間の Au Molou 山塊はほぼ 1,000 m の高さをもつ。キリロム高原 (Kirirom) はこの山塊にある。(訳者注: キリロム高原は松で有名な保養地)

③ プノンペン (Phnom Penh) とシハヌークビル (Sihanoukville) を結ぶ国道 4 号線が通る Pech Nil 峠で上の山塊とへだてられる Damrey 山塊 (象山脈) は、1,075 m のボコール (Bokor) の絶壁が南限となっている。

II 丘陵地帯

Kravanh 山脈の縁辺に、せいぜい 800 m の高さで、上にあげた山塊を区切っている丘陵地帯が広がっている。ちょうどこの丘陵地帯が一方では Kravanh 山脈を海との、他方では同山脈と中央平野との中間地帯になっている。高い地域は森林に覆われているが、平坦部や地味の肥えた河谷部は、人のよく住むところとなっている。

この地帯はつぎの 6 つに区分されよう。

1) 海に面した地帯

海から勢いよく高さを増し、Kravanh 山脈の麓に至る平坦地であって、3カ所の凹部を行く道によって中央平野に通じている。

北の方から南へ Maung と Kas Kong を結ぶ道 (Veal Veng の峠越え道) Sre Umbell と Pursat を結ぶ道 (Tasey を越える道)、Sre Umbell とコンボンスブウを結ぶ道 (Pech Nil の峠越え道) の 3 本である。

多くの Phnom が点在しており、あるものは平野に突き出した小山であり (Chumneap, Veal Rinh)、あるときは Kas つまり島の名でよばれる海から突き出した小山である。(Kong 島の標高は 410 m)

2) バッタンバン (Battambang) 西部の丘陵地帯

Au Chreau から Maung におよぶ地帯で、基盤の岩石の性質によって起伏を異にする山々を含んでいる。結晶岩、砂岩のもの (Phnom Veng)、砂岩と片岩のもの (Phnom Rontea, Phnom Mak Hoeun)、石灰岩のもの (Phnom Sampeou, シソボン (Sisophon) 周辺の山) がある。

3) ブルサットーコンボンチュナン間の丘陵地帯

古い沖積層の高地で、その上にブルサットの近くでは砂岩の小山群 (Komreng) が、コンボンチュナンの近くでは噴出岩の丘陵 (Phnom Kraing Leao) がかぶさっている。

4) コンボンスブウの高台地域

わずかつつ中央平野から Kravanh 山脈へと高度を増す高原で、3つの山塊があげられる。北東部には Chomriey 山塊、中央に Pis, Krol および Preas の山塊、最後に Reachikong の山塊がある。

5) コンボンスブウ-カンボト間の丘陵地帯

砂質の高原で南に行くにつれてその巾は狭くなっている。この高原の主要な山塊は、Phnom Chang Or (722 m)、Preas 山塊 (780 m) および Phnom Thvea の3つである。

6) カンボット-タケオ (Takeo) 間の丘陵地帯

100 m から 300 m の、低い小山の点在する高原である。ケップ (Kep) の丘陵地、Kompong Trach や Tuk Meas の石灰岩の山々、Bacnim-Tani 山塊をあげることができる。

III 中央平野

トンレサップ (Tonle Sap) 湖、トンレトム (Tonle Thom, 大河メコンをいう) の両側に、北西から南東、大きく南ベトナムへと伸びて広がる広大な沖積平野がある。

周辺部は古い沖積土によって、水系に近い部分は後期沖積土によって形づけられた。高度 10 m - 30 m の平坦部で、そのたぐいなき肥沃さ、人口の稠密さは驚くべきものである。この平野は4地域に分けられる。

1) 泥土帯

河岸地域と島々 (中洲) の縁辺部をカバーし、その巾は数十 m から数百 m におよぶ。棉、桑、タバコ、藍の適作地である。ゆたかな村々が並び、道路が四通八達している地域である。

2) 低湿・沼沢地帯

さきの地帯の周囲の、沼沢の多い地帯である。土地は泥土帯に比べて肥沃さにおいて劣りはするが、魚の多い池や沼、それにとろもろこし、ごま、蓮の栽培に適しているといった条件で、人口はけっこう稠密である。トンレサップ湖の洪水林が魚類の産卵、成長に適していることから、大湖は漁業のセンターになっている。

3) 水田地帯

洪水地帯の外側に広がった、自然堤防上の耕地に比べればやせた土地であるが、稲作地域であるために重要な役割を演じている地帯である。水田は、バタンバン、コンボントム、タケオ、ブレイヴエン（Prey Veng）、コンボンチャム（Kompong Cham）およびスワイリエン（Svay Rieng）の各州で、見渡すかぎり広がっている。

4) 残 丘

孤立した砂岩質の構造をもつ小山や丘で、平野のそこそこに突き出している。たとえばタケオ州の Phnom Bati、ブレイヴエン州の Baphnom、コンボンチャム州の Phnom Batheay、シエムレアップ（Siemreap）州の Phnom Kr-om、コンボンチュナン州の Phnom Kangrey などである。

Ⅳ 北部高地帯

中央平野からゆるやかに、ほぼ 300 m の高さまでのぼった高原地帯である。主として古い沖積土からなり、不規則にラテライトで覆われている。サバンナ（疎林）地帯でもある。この地帯を3部分に分けることができる。

1) カンボディア北部高原

バタンバン、シエムレアップ、コンボントムの3州に広がり、中央平野と Dangrek 山脈をつないでいる。この真中あたりには、不連続の小高い山々がみられる。Phnom Svaichek, Phnom Kombot, Phnom Chongkal, Phnom Theng (542 m)、Phnom Koulen (496 m)、Phnom Royom (433 m) などである。この山々の、真中の一線から南に、前の山々よりいっそうとびとびに、よく似た山が中央平野よりそびえ立っている。Phnom Santuk (215 m)、Phnom Roarg (268 m) および Phnom Chi (673 m) である。

2) カンボディア東北部高原

ストウントレン（Stung Treng）とクラチエ（Kratie）の両州に広がっている高原である。トンレトム（メコン河）で切りはなされた、前述の高原と同じ形状の高原である。古い沖積土からなる平坦な地形、サバンナ林の形成、もともと孤立した山はほとんど見られない。

ところが南ベトナム山岳地帯の周辺になると、この高原も、そこから流れ出す河谷や数多くの起伏によって、その地形はいつそう複雑になっている。

3) コンボンチャム高原

200 mの高さに達する北東部から、中央平野に接する南西部にゆるく傾いた高原である。この高原を構成している各部分は、古い沖積土およびその表面を風化によってテール・ルージュ（紅土）としている玄武岩質の層からなっている。

トンレトム河谷の基層である砂岩層の上に、4つの玄武岩質の円丘がずっと横たわっている。Chamcar Leu, Chup, Mimot および Snoul である。

紅土地帯はほとんど、ゴムのプランテーションと畑地で占められている。

V 国境のある高原縁辺地区

タイと南ベトナムの起伏の一部をなすカンボディアの北と東の高地帯は、カンボディア領内に末端が入りこんでいる。

1) Dangrek 山脈

東西に、トンレトム河谷から、タイのメナム河谷までのびた山脈である。もっともこの山脈は一連の山々というよりは、タイ東部を覆う砂岩質のコーラート (Korat) 高原の南端というべきものである。それは砂岩の壁である。東から西へ、700 m から 200 m へと高さを減ずる 300 km におよぶ長い長い絶壁である。

Dangrek 山脈は、北部カンボディアの高原へと垂直に落ちこんでいるが、一方のタイ側へはなだらかなスロープとなって下っている。その不均等は2つの地域で、その水平面の高さにかなりの差があることから説明されよう。すなわちカンボディア側では50～150 m であるのに対し、タイ側ではこれが100～300 m である。

最も高い山々は、東から西にみると、まず Phnom Dangrek (756 m) でこれが山脈中の最高峰、Phnom Preas Vihea (625 m)、Phnom Andong Svay (457 m)、Phnom Mae Kai (537 m) となる。こういった山々の間には、東タイとカンボディア中央平野を結ぶ峠がひらいている。主なものは、Anseh 峠、Don Tapay 峠、Don Ao 峠、Taprom 峠、Kon 峠である。

2) Kontum山塊

中部ベトナムから西へ、ラッタナキリ (Rattanakiri) 州にはり出した山塊である。この山塊はトンレトムの支流でちぎられ、テーブル状の山を作っている。

Sesan 河と Srepok 河の間に、流紋岩を底層とする玄武岩質の高原、ボケオ (Bokeo) 高原が広がっている。もっともその最高地点も 500 m を越えていない。結晶岩層が、この玄武岩の高原の傾斜面を形づくっている。

Sekong 河と Sesan 河の間はかなり高い山塊は、カンボディアとラオスの国境になっている。ここには 700 m を越す峯がいくつか見られる。Phnom Pong Pay (816 m)、Phnom Gran (812 m) と Phnom Rhaiang (701 m) である。

3) Chhlong Leu 高原

900 m の Au Reang から各方角へ高度を減じ標高 400 m にいたる高原である。Preas Bath (Nam Lyr) 山 (1,103 m) が最高峯である。

この高原はその大部分が、玄武岩の風化した紅土とラテライトに覆われている。この高原は巨大な貯水池であって、流れ出す河川はすべてトンレトムに注いでいる。Yok Lach つまり「草の高原」は、その名前のとおり珍しい草花に覆われた高原である。その反対に 700 m から 400 m にかけては、サバンナ林がこれを覆っている。

第 2 章 気 候

カンボディアの気候は、一般に暑くて湿気が高いといえるが、それも地域と季節によって程度に差がある。この気候条件を決定するのはつぎの3つである。

1) カンボディアが、赤道近くに位置しているということ。北緯 10°から16°にわたって広がるカンボディアは、熱帯圏にあるということである。

2) カンボディアがモンスーン・アジアに位置しており、その気候がモンスーン（季節風）と呼ばれる定期的に吹く風の存在によって特徴づけられているということである。この季節風は2つのはっきりした季節をきめる。乾季と雨季がそれである。

3) カンボディアの海への開き方と Kravanh 山脈の存在である。湿った季節風は Kravanh山脈に体当たりをくらわす。こうして Kravanh 山脈のどの地点でも、中央平野に比べて雨が多く降る。

I 気候決定要因

気候を決定する主たる要因は気温、風、降雨型、湿度である。

1) 気 温

時と場所を問わず、気温は高い。プノンベンの年平均気温は 27°4（摂氏）である。

年間の気温曲線には最大値が2回みられる。1回はかなり著しい4月(29°4)、もう1回は8月(27°7)である。最小値も2回みられ1回は12月(25°6)、もう1回は7月(27°3)である。プノンベンにおける最低・最高気温はそれぞれ 14°0(1月)、40°5(4月)という記録がある。

一年を通じて気温はつねに高く、ほとんどかわらない。プノンベンにおける最暖月の平均気温と最寒月のそのの較差は 3°8 である。山地や丘陵部でもこの較差は Au Reang で 4°2 と小さい。もっともこの場合、年平均気温はほぼ 20° であって、ポコールのような高原保養地は健康的であるといえる。

2) 風 系

カンボディアに規則的に吹きわたる風はモンスーンと呼ばれるものである。

1 1月から4月にかけて北東モンスーンが吹く。これはシベリア中部の冷気団形成と関連があるから「冬のモンスーン」というべきものである。最も強い北東風が吹くのはだいたい1月である。大陸部からやってくる冬のモンスーンはつめたい。しかし雨はもたらさない。

5月から10月にかけて、南西モンスーンが吹く。インド洋からシベリアの中部へと吹く「夏のモンスーン」である。南の海洋部からやってくる夏のモンスーンは、暖かく湿っている。

3) 降 雨 型

カンボディアは高い湿度の国であって、どの地点でも、年間1,000ミリ以上の降雨がある。

気温におけると同じように、降雨についても2回の最大値と最小値がある。すなわち降雨量の年間曲線の2つの最大値は、かなり著しい10月(252mm)、それに次ぐ7月(165mm)がみられ、最小値は1月(7mm)と8月(157mm)にみられる。

雨の降り方は、モンスーンの有無と密接な関係がある。北東モンスーンに対応する12月から5月までの乾季(この間ブノンペンでは15日間しか雨が降らず、その量も180mmでしかない)と南西モンスーンに対応する5月から11月にかけての雨季(この間ブノンペンでは105日間雨が降り、その量は1,217mmにのぼる)とがある。

地理的にみて降雨の分布はその土地の起伏と関連がある。Kravanh 山脈や海岸地帯は最多雨地である。Kas Moulでは1923年に年間7,971mm、月間2,515mmの降雨を観測した。

中央平野は、Kravanh 山脈によって海からさえぎられているがために、山脈とは対照的に雨が少ない。北の高原はといえば、高さが加わるという理由で、雨量は少し多くなっている。

4) 湿 度

大気中の水蒸気によっておきる気象現象は数多い。雲、雨、露などである。

大気の湿度は1年のうちで変化をする。最も湿度の高い期間は最多雨月(7月)と一致する。湿度の最も低いのは乾季(2月)で、生物にとってその生活条件が最もつらいときなのである。

Ⅱ 気 候 区

カンボディアはつぎの5つの気候区に分けることができる。

1) 南 西 区

この地域の海岸部は高温多湿で、高地部では冷涼、多湿である。海沿いの地方と、モンスーンがつき当る Kravanh 山脈地方は、最多雨地となっている。この地域は最多湿地域であるために、また、常緑の密林地帯となっている。

高温ではあるが、海からの微風がはげしい気象条件をやわらげており、動植物の生育がいいのもこうした理由によっている。

2) 中央平野区

周囲の山々によって湿潤なモンスーンからさえぎられているため、この気候区は他の地域よりもきわめて高温で、また乾燥している。2月から4月にかけて、とくにその気候は耐えがなくなる。ほとんどの地方で、年間降雨量 1,050 mm 以下である。

洪水をもたらす肥沃な泥土にささえられた1年生植物の栽培地域である。

3) 北カンボディア区

ここでは気候は一定して高温、多湿である。大陸型に近い気候区であるので、日中はうだるように暑い、夜間は冷気がひろがる。植生はだいたい全域がサバンナ林である。

Ⅲ 生物に対する気候の作用

暑くて湿度が高いというカンボディアの気候は植物の生育に都合がいい。森林は、そしていろいろな意味での価値を、その中に秘めている。しかし中央平野や北の高地帯では、乾季があまり長いものだから、サバンナ林だけがひろがっていくことになる。

気候はカンボディアの富を作り出す要素である一方、恐ろしい災害にいつもおびえねばならない原因でもある。毎月、毎年、降る雨の量がちがうということは、経済的視野からみて重大であり注目に値する。いくつかの地域では、こうした不規則な降雨が、しばしば長く続きすぎる乾燥状態や大雨をもたらして、作物栽培の妨げとなっている。極端に激しくもなる大雨は毎年たいへんな洪水と土壌の侵蝕を引起している。そしてそれは人民をいためつけ、交通路に

損害を与える原因になっている。農民は同時に、2つの災害の絶えざる脅威を感じながら生活をしていることになる。すなわち毎年避けられない早ばつと、雨季になればやってくる洪水とである。早ばつに対する闘いはまた、社会的に是が非でもやらねばならない必然性をもっている。灌漑設備を作らねばならない井戸や貯水池を掘らねばならない。水に対する国の施策は、早ばつの損害を少しでも軽くしようという目的をもっている。

つまるところ、カンボディアの気候は人間生活にはあまり好ましいとはいえない。沼沢の多い平野や高地にはマラリヤが発生する。人々はいつも伝染病の恐怖にさらされている。天然痘だ、コレラだ、ペストだ。しかし、たとえこういった病気がなかったとしても、その暑さは心身を疲れさせてしまう。生活条件は保養地の方がやはりいい。海岸（Kep）か、高原（ホコール、キリロム、Au Reang）かである。

第 3 章 水 文

カンボディアの水流は、主要な3つの流域にまとまる。トンレトム河谷、トンレサップ流域およびタイ湾域の3つである。

1 トンレトム河谷（メコン）

メコンは世界最大の河川の1つである。その長さ4,200 Km（アジアでは長さで4位）、中国、タイ、ラオス、カンボディア、ベトナムを貫いて流れる。カンボディア領内の長さは、そのうちの500 Kmにすぎない。

1) メコンのあらまし

メコンはその源を、海拔5,000 mのチベット西部、中国に発する。その流域は80万平方Kmと推定されている。メコンはその流れを3つに区分することができる。

—水源からヴィエンチアン（Vientiane, ラオスの首都）までの「上流部」。メコン河は雲南高原を横切り、河床をえぐってけわしい峡谷をきざむ。中国を1,700 Km流れてラオスに入りこむと、もはやメコンは巾300 mから400 mにおよぶ大河となる。ヴィエンチアンまでのメコンの河床は岩礁でせかれまた急流にちぎられ、たとえ丸木舟といえども、その航行は不可能か危険のどちらかである。この上流部では、メコンはその土地土地の起伏や地形によって、まったくその流れを左右されている。またこの間に左岸から、いくつかの速い流れの支流が流れこむ。

—ヴィエンチアンからクラチエに至る中流部。中流部に入るヴィエンチアンのメコンは、標高わずか160 mを流れ、海までは1,600 Kmである。中流部を構成するものは、いくつかの航行可能な河区と、それらをちぎれちぎれにするつぎのような多くの急流（早瀬）の部分である。すなわちKhemmerat（全長150 Km）、Khone（12 Km）およびSambaur（50 Km）などである。（訳注：Khoneはラオスとの国境に近い地名。コーンの滝で知られる）この区間でメコンは、いくつかの大きな、主として左岸からの、支流をあわせる。

—クラチエから南シナ海に至る下流部。海から510 Kmの地点にあるクラチ

エからは、船の往来が一年中可能となる。ブノンベンで、メコンはトンレサップ河と合流し、ここに「4本の腕」を作る。トンレサップ河、バサック河（合流後の河）、上流からきたトンレトム（メコン）、下流へと流れるトンレトム（さきの河）の4本である。（訳注：トンレトム本流は北東からトンレサップ河は北西から、それぞれ流れきて合流し、その後トンレトムは南東方向へ、バサック河はほぼ真南へと下って行く。ちょうどブノンベンの南で変形のX字をなし、これを *Quatre Bras*（4本の腕）と呼んでいる）メコンの三角洲には数多くの分流がみられ、その巾はしばしば2 Kmにも達している。こうした水路にはまた、多くの島（中洲）や砂洲が、ちょうど目じるしに似たように発達している。デルタはすでに600 Kmにまで伸び、なお絶え間なく浅海をつくりながら、海岸のむこうへと進みつつある。

2) トンレトム（カンボディア国内のメコン）

トンレトムはKhoneからベトナムとの国境まで、その長さは500 Kmである。高水位期における流量は3万4千立方mと推定されている。これは低水位期のその約20倍にあたる。その流れは、かなり規則正しい。

乾季、すなわち11月から5月にかけて、トンレサップ河はトンレサップ湖の水をはき出す役目を果たし、トンレトムはブノンベン（「4本の腕」）でその水とまざって、2本の大きな分流で海へとはいって行く。雨季、つまり6月から10月の間には、チベットの雪どけ水と大雨による水がメコンにはき出され、すさまじい勢いで、しかも水深はいくつかの地点で30 mにもなって、流れるのである。この手に負えない水かさの増加は、下流による海への排水方法では少しばかり間にあわなくなるほどである。やがて増えた水はだんだんと逆流しはじめ、南にある水路のすべてになだれこみ、最後にはトンレサップ河をまるっきり逆方向にむけさせて、水はトンレサップ湖へとさかのぼることになる。

増水と減水がいっしょになる時期が一度だけある。増水がはっきりしはじめるのは7月に入ってからのラオスで、それからだんだんと南へ下ってくるが、ブノンベンの前で最高に達するのは9月の終りになってからである。この最も水かさが増えたときの水面の高さは、ブノンベンで最低水準プラス7ないし9 mになる。

クラチエからBanamの間のトンレトムに沿ってある池や窪地も、同じくメ

コンの流れを調節するという役目を果している。一般に河の断面というものは、1枚の河床が平野とか谷の側面とかにさえぎられた形で、底の方にむかって傾斜しているものであるが、トンレトムの断面はその反対というか、とにかく普通とはちがっている。この河の場合は、正確に言うならば、その兩岸にあたるところが広い窪地になっていて、しかもそれはしばしばかなりの面積をもっている。だから水かさが増すときには、水が平野の方からやって来て流れこむのではなくて、逆に河の方から平野（平坦部）へ流れていくという格好になる。

池や湖の水かさの増加は、河川の増水如何であるが、氾濫のときも減水のときも、その水かさの増え方にはある遅れが伴う。つまり池や湖は、Prek と呼ばれる水路でつねに大きな河川とつながっている。そこで水が減って行くところのPrek は一般に干上り、池の水面は最も低くなる。洪水期には水は池へと流れ込み、その水面が高くなる。減水期には池の水はPrek を通じて河の方へ流れこむ。こういったわけで、池や湖は水かさの増加を調整するべく余分の水を吸収し、水が減って行くときには減りすぎないように調整しながら水をもとに戻す。水系の安定という点からみて、こうした池や湖の果す役目は価値があるといえる。

3) トンレトムの支流

トンレトムの主要な支流として、つぎのようなものがある。

- Tonle Repou。右岸にあってラオスとの国境になっている。
- Sekongとその2つの支流、すなわちSesanとSrepok。Sekongはラオスのボロベン高原から、SesanはKontoum高原から、SrepokはベトナムのDarlac高原から流れてきている。
- Prek KriengとPrek Kampi。両方をも大きくない川で、乾季には涸れる。
- Prek Te。水源はChhlong Leu高原にある。川の流れは不規則で、雨季になると急流になる。
- Prek Chhlong。水源は同じくChhlon Leu高原。深い緑ゆたかな森林を横切って流れる美しい川である。
- Tonle Tauch。ChiheからBanamまで、低い土地の凹部と沼沢地を通じて流れる。

4) メコンの役割

まず第一にメコンは、1年を通じて航行可能な一級河川である。カンボディアは自然の規則正しい現象、つまり増水と減水にそのゆたかさの大部分を依存し、生きている。このリズムをもった水の運動こそが、国の開発につかわれるほとんどのエネルギーを満たすものなのである。

メコンは高水位期に冠水した土地に、よく肥えた泥土層を運んでくる。自然堤防の上の人たちは、河とその脇にある窪地をわける土地に生活している。この細い帯状の土地はまったく肥沃で、農園で栽培されるすべての農作物に高い価値を与えている。

また減水期の池は、大切な漁場となる。増水期中に、魚は水とともにこうした池へなだれこむが、そこは産卵と稚魚の成長にはまことに好条件の場所なのである。減水期に入るとこの魚は、それをつかまえるべく作られた堰のある川へと集ってくる。

II トンレサップ流域

ブノンベン（「4本の腕」）でトンレサップ-バサック水系とメコンの水系が時とともに結合し今に至っているのは、平野の中の低地がメコンに働きかけ、メコンがその方にひきずられた結果の河流変更とみられよう。

1) トンレサップ(河)

メコンと合流するようになる前のトンレサップは、メコンとは別に中央平野の水をはく1本の河であった。その水源はPhnom Ronteaの山中であると思われ、また上流部はソソボン川にあたると考えられる。

ところでトンレサップ湖は、北西から南西にのびていた、かつての海湾の中央部を占めている。湖に沿った州はシエムレアップ、コンボントム、コンボンチュナン、ブルサットとバタンバンである。乾季の湖は長さほぼ150Km、最大巾32Km、面積3,000平方Kmであるが、氾濫が最高になったときには、面積は1万平方Kmになんなんとする。

トンレサップ湖はつぎの3つに分けられる。

- Beng Thom (太湖) 北に位置し、長さ75Km、巾32Kmをもつ。
- Beng Tauch (小湖) 中央部であって長さ35Km、巾28Kmにおよぶ。

＊ Veal Phoc (泥海) 低くて砂質の小さな洲がちらばる広い泥土帯であ
って、植生は貧弱である。

2) 湖の変化

トンレサップ湖は季節により、交互に2つの様相を呈する。深くて航行可
能な正真正銘の内海の様相と、その反対の浅くてどろどろの大きな沼地のそ
れである。

低水位期は12月にはじまり5月で終る。水深はそのとき最小(平均して
0.8 m から 2 m)となる。水深はコンボンチュナンから泥海にかけて小さく
なり、そこでは船の航行ができなくなる。この時期にトンレサップ湖は独特
の景観を示し、全湖面で漁獲が行なわれる。吃水の浅い小舟ならば、まだ往
来ができるのである。

雨季になるとトンレサップ湖の様相が一変する。面積は大きくなり、水深
はどんどん大きくなって周辺の平野へ浸水して行く。水深は泥海をも含めて
12 m から 14 m に達し、乾季に比べると10 m ものちがいをみる。大型船
舶も湖を航行できるようになる。

3) トンレサップの支流

a) 左岸の支流

- Dangrek 山脈から流れ出す Stung Sreng は Stung Sangke と合
流する。中流でこの川はパタンバンとシエムレアップ両州の境界線となる。

- Stung Siemreap と Stung Rolous は、ともに Phnom Koulen に
源を発する小さな川である。前者はアンコール (Angkor) の遺跡群の近く
を流れ、バライ (Barai) の貯水池を満たす。

- Stung Chikreng と Stung Staung は、Tonle Chhmar という沼
沢地帯に流れこむ。

- Stung Sen は多くの谷川を集めて Dangrek 山脈を下る。その長さ
およそ 450 Km。コンボントムに達するまで何回も蛇行をくりかえし Chhnoc
Trou の瀬戸の対岸でトンレサップに流れこむ。

- Stung Chinit は Stung Tang Krasaing と Stung Porong を合
わせて大きくなり、Kompong Thmar を通り過ぎて泥海に注ぐ。

b) 右岸の支流

- Stung Mongkolboreyの水源は1,470mの高さをもつタイのPhnom Sai-khaoである。

- Stung Sangkeの水源はPhnom Tadethの西にある高さ700mのPhnom Talorである。

- Stung Dauntryは源をPhnom Tuk Pril(1,123m)に発し、Maung郡の郡庁所在地を通過する。

- Stung Pursatの源はPhnom Khmoch(1,425m)に発する。この川は荒れ川でしばしば洪水を起す。

- Stung Babaurはコンボンチュナン州のBabaurを通して流れる。

- ウドン(Oudong)の町を流れているのは、Stung Chrioである。

- Phnom AuralとAu Moulou山塊の小流をあわせたPrek Thnotは、コンボンブウとTakhmauをうるおす。

- Stung TakeoはChaudocでバサック河に合流する。

4) トンレサップの役割

トンレサップとその支流は1本の水上交通路となって、この地方に大きな利益をもたらしている。雨季になると、帆をかけた多くのジャンクが湖を行き交う。100トン以上のランチやジャンクが、周辺の川に入りこむ。しかし乾季になると、トンレサップ湖を往来するのは小さな舟だけになる。

のみならず、トンレサップ湖は何といても、漁業の一大センターである。洪水林のおかげで、ありあまる栄養をたくわえた、世界で最も魚の多いところなのである。

Ⅲ タイ湾域

Kravanh山脈の海側の斜面には小さな川が網の目のように走っているが、その重要度は二次的である。

1) 概況

タイ湾域の河川は長くない。主要な川はその源を500mから600mの高さに発し、滝となって流れ下り、また周囲の斜面から落ちて来る水をあわせる。平坦部にたどりつくと、15Kmから20Kmも蛇行しながら流れ、海岸部へとや

ってくる。デルタに入ると流れはいくつかに枝分かかれし、それもマングローブによってゆっくりと固定された軟泥の中へしみこんでゆく。

乾季には溜れている多くの沢も、雨季に入ると大量の水を河床へと押し流す。水かさの増えた川はスピードを増して恐ろしい音をたてながら岩を、木々を流れてまきこんで、短期間の洪水をひきおこすのである。

こうした海岸に近い河川のもう一つの特徴は潮の干満の影響をうけるということである。乾季には潮はやすやすとこうした河川を遡りその至るところすべてを塩水化する。が一方雨季になると、河川の流れにはばまれて潮はデルタからむこうに進めなくなり、河水は塩水化されなくなる。潮と河川の流れが均衡するところには、砂や泥からなる洲ができ、これが航行をししばしば阻害する。

経済的な見地からすると、こうした理由で、海岸に近い河川はほとんど価値がないといえる。

2) 主要な河川

北から南へと見ていくと

- Stung Metuk は Phnom Thom (1,258) に源を発し、国境に平行して流れる。Stung Russey Chrum を左岸で合わせて Thnal Krabey の対岸で海に注ぐ。

- Prek Tatey の名はその水源から遠くない Tatey 村に由来し、その右岸に Stung Kep と Stung Sala Monthon をあわせる。

- Stung Chai Areng は起伏の多い、まがりくねった川で、主な支流は Prek Yuon, Prek Smonh と Prek Tachan である。河口に至る前でこの川は急に大きく曲り、そして Prek Tatey が注ぐ同じ入江に入る。

- Prek Piphat はコンボンソム湾に注ぐ。この河谷は高地への自然のルートとなっている。多くの泥が集って上流域を形づくっている。

- Prek Kompong Som は Sre Umbell の近くでコンボンソム湾に注ぐ。右岸で Stung Kompot と Stung Samrong を合わせる。

- Kampot 川の水源地は Pech Nil 峠に近い Damrey 山塊 (象山脈) の中にある。カンボットの数キロ上流の右岸で、ポコールのポボックビル (Popokvil) から来る支流、Stung Kamchay を合わせる。

- Tuk Meas 川は Tonhon で南ベトナム領土内を貫いて Hatien 湾に注ぐ。

Vinhte 運河はこの川をバサック河につなぎ、またカンボディアとベトナムの
国境線になっている。

こうした海岸に近い河川のほかは、雨季に多量の土砂や有機物を運びこむ小
さな沢でしかないが、それはまた海岸部への絶え間ない沈泥となって大きく役
立っているのである。

第 4 章 海 と 海 岸

カンボディアの国境線の $\frac{1}{6}$ は海岸で、その長さは435 Kmである。その海岸線はただ一つの海、タイ湾に面している。そこは海の生物の生長にとっても、適している。

1 タイ湾

平坦な海底をもつ浅い海で、マラッカ(マラヤ)半島、スマトラおよびジャワ島とカンボディアをようやく分離している。水深は平均50 mの大陸棚で、水位も75 mを下らない。

海図作製作業が明らかにしたところでは、海底はたえず隆起しており、やがては船舶の航行もむつかしくなるだろうという。沿岸も東の方で隆起があったとみられ、その証拠にテーブル岬(Cap de la Table)では高さ50 mの岩壁に古い海蝕洞を観察しうる。同様に海賊諸島(Phu Quoc島の東にある)の頂部にはよく保存された貝殻層を見ることもできる。この隆起と同じく、そこには土砂の沖積もおきている。これとは対照的に、西の方では溺れ谷がコロン地域に見られ、これはこのあたり全般に沈降があったことを証明している。

タイ湾の海面は、北東モンスーン期(12月から4月にかけて)では湖面のように静かであるが、南西モンスーン期(5月から11月にかけて)にはうねりがずいぶん高くなる。南シナ海の恐るべき風サイクロンとは、ここはまったく無縁である。危険はほとんどない。岩礁や暗礁もここにはない。

タイ湾が潮汐の影響をうけることは、他の海と同じである。一日24時間のうちに2回の干潮と、それによって分けられた2回の満潮をみる。太陽と月の引力によって、海面に変化がもたらされ、潮の干満がおこる。

タイ湾はまた地域的な海流の影響をもうける。その流れる方向や速度は、その時に吹くモンスーンの風向や風力によって異なる。カンボディアの沿岸海流はしばしば非常にきつく、ときには24時間で130 Kmの速度を記録する。

北東モンスーンが吹く間は、南シナ海の手流は南西方向に進むことを余儀なくされるが、一部はマラッカの沿岸を北に北上するので、ちょうど時計の針のような流れをみせる。カンボディアの海域では、海流は東北から南西へという

方角をとるので、海岸部はその影響をうけない。北東モンスーン期は、カンボディア沿岸漁業のシーズンに一致する。

南西モンスーンが吹く間は、逆の現象がみられる。海流はカンボディアの海岸にくだけ、海岸ぞいに北へと流れる。その上この風による波がカンボディアの海岸いっぱい、真正面から来てくれる。南西モンスーン期はしたがって海上の条件が悪いので航行に辛く、また危険が伴う時期にあたる。

タイ湾は航海には都合がいい。今日に至るまで、小さな動力船や帆をかけたジャンクが湾内を航行し、沿岸の人々に物資を補給したりまた海産物の集荷を行ったりしている。

シハークビル港は遠洋航路の船の停泊もできるので、これからのカンボディアの海岸部の経済的開発がこの港より速められることはじゅうぶん期待できる。

II 海 岸

カンボディアの海岸を構成するのは、SmachとVeal Rinhの2つの底部が長方形をした大きな半島で、両者はコンボンソム湾の深い切れ目でへだてられている。

低く湿っていてマングローブに覆われた海岸と、岩がごつごつし不連続な、しばしばそれを取りまいてfilaoの生えている砂浜のある海岸とが、ここではきちんと交互にみられる。一般に山が海にせまっているところの海岸は岩石質で起伏も大きく、航行も危険である。それでもVeal Rinhからケップに至る海岸は例外であって、ここは象山脈から遠くないにもかかわらず、大きなPhu Quoc島が屏風のように南西モンスーンをさえぎる結果、沖積土が定着しやすくなっている。そのほかの沿岸部はどこでも、海岸を流れる河川のデルタであり、沖積作用がやむことなく続いている。

北西から南東へ、カンボディアの海岸はつぎの5つの部分に分けられる。

1) タイとの国境(Cham Yeam)からPrek Kokiまでの海岸は低湿で、マングローブ林が続く。多くの漁民の村落があり、たとえばThnal Krabey(Snam Krabeu)、Kas Kapikがそうした村である。コッコ州の州都であるKas Moulは、棧橋で陸地と結ばれた小さな島の上に立っている。

2) Prek Koki から Chruoy Sorivong にかけての海岸は、山が急にせままって、モンスーンにたたかれて岩がごつごつしており、起伏にとんでいる。もっとも岩が海に突き出しているようなところは、ほとんどない。岬のいくつかは filao やココやしにふちどられた、絵のような湾を抱いている。Yeay Sen 岬、Smach 岬、Srivong 岬などがそれである。

多くの島々からタイ湾にこうした岬がのびている。このあたりはほとんど無人地域である。

3) コンボンソム湾は、帯状に並んだ山がちの、木は生えているが人の住まない島々によって外海の方には閉ざされている。この湾の東と西を限るのは Sorivong と Thmar Sar (Cham Ko という漁村がある) およびシハヌークビル港のある Veal Rinh の各岬である。

コンボンソム湾の概観は、南西モンスーンの風向に平行した回廊のようになって、その湾の巾は時に 30 Km に達する。湾の西側の沿岸は低く直線的であり、東側の海岸は北の方で低く、南の方では暗礁が散在している岩石海岸になっている。この巾広い湾も、海岸を流れる河川の運搬物によって、少しずつではあるが埋もれつつある。

4) シハヌークビルから Tuk Sap の入江にわたる海岸では filao 覆われた砂浜と岩石海岸が交互にみられる。Ream の美しい湾があるのは、この海岸の中ほどで、またその奥にはモンスーンをよくさけている Ream の港がある。

5) Tuk Sap の入江からベトナムの Hatien に至る海岸線は、低くて泥のたまった浜をもつ Tuk Sap と Veal Rinh の、2 つの入海で深くえぐられている。それから先は、岸が泥で円弧を描き、ポコールの断崖が突き出し、マングローブが茂る。カンボット川の河口の東側になると、海岸は海水浴場のあるケップの岩の岬を唯一の例外として、つねに低い。

Ⅲ タイ湾の島々

主要な島々はずぎのとおり。

1) Tatey 川の河口の北側にある一まとまりの島々。このあたりの土地が海中に沈んでできた島々である。Por, Kapik, Chau Leau や Sket などの島々があげられたう。

2) コッコン島はカンボディアでは最大の島である(約80平方Km)。高さ410mの山であって、かつての火山活動に伴う断層で、陸地から切り離されたものである。島の西側にある海岸は、南西モンスーンに吹きさらされるため切立った岩石海岸になっていて、ほとんど近寄りづらい。反対に島の東側は風があたらず、いくつかの地点では農耕が行われている。

3) Smachの岬をふちどる海岸に沿って、岩の多い小島が珠数つなぎになっている。この島々の中でとりあげるのは、同名の岬の南にある、Dambang 島、Pras 島、Buon 島(「四ツ島」)で、これらはSmach島のまわりにちらばって1グループをつくっている。

4) Rong 島と Rong Samlem 島はコンボンソム湾の沖の方をふさいでいる。風のあたらないSaracen 湾などは、一艦隊全部が楽々と入れるくらいに大きい入江である。この2つの大きな島々には、陸地からはかの島伝いに連絡することができる。

5) Veal Rinh 半島の沖合の島々は、3つのグループからなっている。シハヌークビル港の正面にあるのはPos 島(蛇島あるいは「肱の島」)である。Reamの前面には、Russey, Tres, Chamlos と Sramoch の各島にとりまかれたかっこうで、Takiev 島がある。最後のグループはカンボディア最大の島であるPhu Quoc 島に連なる、Thmey 島と Ses 島からなる。

6) Phu Quoc 島はベトナム領であるが、かつてはカンボディアの一部であった。この島は、カンボディアの海岸を南西モンスーンから保護する大きな島で、また多くの漁村の風上にあつて風をさえぎっている。

7) 最後はケップの海水浴場の南のSvay, Antay, Thbal, Pos, Angkong および Ses といった島々である。

タイ湾にあるこれらすべての島には、ほとんど人が住んでいない。そしていまだ開発されていない深い森林に覆われている。そのかわりに北東モンスーンが吹く頃は、このあたりは一大漁場になるのである。

第 5 章 土 壤 と 動 植 物

カンボディアにおける土壌、地下資源、動植物のゆたかさと多様さを説明するのは、土壌形成の歴史と、気候のメカニズムである。

I 土 壤 資 源

地史と現在の地質構造からみて、カンボディアの土壌はきわめて変化にとんでいるという印象をうけるが、その主たるものは中生代の地層と新生代第 4 紀のそれである。

古生代の地層の名残りは、カンボディア南西部の古い山塊に姿をとどめている。(Kravanh 山脈、Tang Phloch 地域)

国の大部分を覆っているのは中生代の地層である。中生代砂岩層は、いくつかの地点で千 m 以上の厚さに達している。

第三紀層はほとんどみられない。これは火成層である玄武岩層を除いて、ほとんどすべてが第四紀層によって被覆されているからである。

第三紀層とは反対に、第四紀層は広く拡がっている。中央平野の地層もこの地層で覆われているが、これは第四紀のはじめ頃、現在のカンボディア中央平野は、まだ広い海湾であったからである。

こうした土壌形成の歩みから、土地の本質が説明されよう。すなわち高い地点は花崗岩、砂岩と玄武岩質であり、平野は粘土質の砂、自然堤防、水路、湖の周辺には沖積土というわけである。

玄武岩の風化によってできた紅土や、河谷に沿って堆積した近年の沖積土壌は、よく肥えた土壌である。この地帯は、ゴム、野菜類、穀物類がゆたかに作られる。

粘土質の砂の場合は、ずいぶん差がある。つまりその生産性ということになると、ある程度土の保水力のよしあし、人が集約的に作業をするかどうかということにかかってくるからである。水田になっているところもあり、森林になっているところもある。

山地は、その大部分が森林に覆われている。

Ⅱ 鉱物資源

カンボディアの地下資源の組織的な探査は、まだほとんどはじまっておらず、この国の鉱物資源のはっきりした可能性についてもよくわかっていない。

カンボディアはまた、油層または炭層を有していると思われる。金層資源もいくつかの地域には存在する。

コンポントム（Kompong Chhnang）の北にある Phnom Dek からは磁鉄鉱、褐鉄鉱、菱鉄鉱が見つかっている。こうした各種の金属の価値は、古くから知られていた。たとえばこの地域に住む少数民族のクイ（Kuoy）族は、鉄で道具や武器を作ることを専門として今日に至っている。コンポントム、ストゥントレンとコンボンブ州には、他の金属資源、銅、鉛、金など、その量は少ないが存在する。

燐酸塩と石灰の層は、カンボットとパタンバン州にある。

燐酸塩は、簡単な機械で砕いてから、農業用肥料として使われている。同じ地域から出る石灰岩は、セメント工場に供給されている。

カンボディアでみられる宝石としては、鋼玉（ルビー、サファイア）とジルコンがある。主要な採掘地はパタンバン州のバイリンとストゥントレン州のボケオ（Bokeo）の2カ所である。ゼノト（黒石炭）はビロード黒色をしており、コンポントム州で装身具を作るための材料として採掘されている。ストゥントレン州の水晶は、光学機器の製造、めがねの製造に使用される。プルサットの大理石はバゴダ石ともいわれ、装飾品や祭器の製作に使われる。

カンボディアには建築用材がふんだんにある。コンボンチャムとコンボンブ州には玄武岩、ラテライト、タケオ、ストゥントレンとシエムレアップ州には砂岩がある。アンコールの遺跡は、Phnom Koulen の砂岩とラテライトで建てられたものであった。粘土、礫、砂は河川の近くならどこにでもあり、陶器、煉瓦、瓦や漆喰を作るのに使われている。

Ⅲ 植物相

カンボディアの変化にとんだ植物相は、その気候と土壌によっている。広大で、しかもほとんど開発されていない森林には、建築や家具の製造に適した樹種が数多い。

洪水林には、ひるぎの仲間がはえる海岸の洪水林（マングローブと後方マン

グローブ)と、トンレサップ湖や河谷の緑辺の淡水の洪水林が含まれる。

広大な面積を占める高地林(山林)は、その土地の土壌の構成や、これまでにどの程度集約的に開発されてきたかなどによって豊かさも異なる。

この林相を特徴づけるのは、複雑にまじりあった数多くの樹種である。

一方、やせた砂岩質の土壌や砂地には、きわめてわずかな種類の木、Khlong, Thbeng, Trach, Kreul といった木を含むサバンナ林がみられる。この疎林ともよばれる林のもつ特色は、下生えに Sbau という草しかもたないことと、他の森林にはみられないほどしばしば定期的な火事に見舞われ、それがこの林の成長、とりわけ再生を妨げているということである。

玄武岩の風化によってできた土壌(褐色土壌とよばれる)には密な林相はみられないが、構成している樹種は、Thnong, Neang Nuon, Krakas, Sralao, Choenteal といった高価な材木になる木々である。

粘土質の、硅土を含んだ適度に肥沃な土壌の場合には、Choenteal を主とした Chorchong と Khnor Prey を含む、かなり茂った林がみられる。

紅土や腐植質の硅土には、Choenteal, Koki, Sralao, Phdiek, Chramas といった有用樹種で構成された、非常に密な森林相がみられる。

湿った風のあたらない山地には、二葉松という、これも高価な木の純林がみられる。

密林にはバルミラやし、竹、蔓の仲間や藤がふんだんに生えている。

農民は米作のほか、とうもろこし、甘蔗、棉、タバコ、果樹(マンゴー、パパイヤ、バナナ、パラミツ等)、野菜(タロ芋、甘藷、タピオカ、落花生、味豆等)の栽培も営んでいる。最近になってゴム、コーヒー、茶の栽培も行なわれるようになり、すでに何種類かの野菜や果樹は、カンボディアの気候にあうようにされた。

N 陸棲および水棲の動物誌

カンボディアの気候は、すべての種類の動物群にとって好条件を与えている。

陸棲の動物は多様で、数も多い。家畜のほかには野牛(水牛、Ansong, Khting, Kouprey)、象、犀、虎、豹、猿、蜜をなめる熊、マングース、蛇、せんさんこう等が棲息している。野鶏、くじやく、きじ、蜂雀、きじばと、し

ヤコといった鳥は森林に多い。河岸や沼沢地には、わし、あおさぎ、ペリカン、鶴、鷓といった鳥が多い。

とくに水棲動物に有利な条件のおかげで、カンボディアの河川や湖沼に、魚類はきわめて豊富である。魚の産卵を保護に格好の場所となる洪水林をもつトンレサップ湖は、世界で最も魚の多いところとなっている。

河川や湖に住む魚の種類も、また豊富である。同じくワニ、亀、甲殻類も多い。水棲動物の採取、漁業は、国の主要産業の一つである。

第 6 章 住 民

カンボディアは、2つの文明の通商路の交叉点に位置している。2つの文明それはインドとシナ（中国）のそれである。クメール文明は、その2つの文明をひきついでいる。

I 民族史

① カンボディアの地は、最初、かなり色白のインドネシア系の民族によって占拠されており、これが真の原住民であったようである。彼らはずいぶんと長い間、Nokor Kok Thlok（カンボディアの古名）に住みついていたようである。彼ら原住民も、コロマンデル海岸（南インド）起原のネグリートに屈服させられ、またドラヴィダ人、色白のアリアン人にも圧迫され、遠い昔に民族出生の地を、侵入者の絶え間ない圧力のもとに捨ててしまったのであろう。Pann-nonn（無法者）と呼ばれるこのネグリートは、東南アジアのいくつかの地域を占領し、原住民と混血していったものと思われる。

おそらくこの侵入の後に、カンボディアの最初の住民は多くの部族を形成した。あるものは北の山地に、あるものはトンレトムの河谷や沿岸地域に住んだ。すべての部族は、コロマンデル起原のネグリートとの混血によって、体色は濃く、髪はちぢれていた。その後の侵入者によって圧迫された彼らは、中心からはなれた地方にむかって集っていった。今日のブノン（Phnong）、クイ、サムレ（Samre）、ベアルといった山岳民族がそれである。

② 紀元前3世紀になって、インド人移民の彼がつぎつぎと遠い地の富に魅せられて、東南アジアの島や大陸部に植民地をつくりに出かけた。パラモン僧や商人は、彼らの荷物の中に、インドの文化と宗教と、そして彼らのことばであるサンスクリットを持ち運んだ。インドシナに来て、彼らインド人が出会ったのは、すでに秩序ある社会を形成していた2つの民族であった。ベトナム中部のチャム（Cham）とトンレトム河谷のクメールである。

クメール民族はつまり、インド人と原住民という、まったく異った2つの要素の結合によって生まれたのである。それは世間で信じられているような、純

粋のインド人たちが、住民のまったく居なかった土地に定着したというのではなければ、大量殺りくや追放によって、土着の要素を取除いてしまったのではなかったのである。クメール民族は、インド化した原住民であるといえる。

③ カンボディアは、またすぐに、新しい民族の侵入をうけたにちがいない。事実7世紀には、ジャワのインド系マラヤ人が、カンボディアに入ってきた。カンボディア人が伝説の中でいう Chvea-Pream (バラモンのマラヤ人) というのは、この侵入のことである。このとき平野部の住民は、やすやすと新しい侵入者に屈服したが、高地の民族は今日に至るまで、民族的にはもとのままの姿を保ってきている。

今なおこれら高地民族は、ほとんど完全な孤立の中で生活を営んでいる。

平地のよりまとまった民族にとりまかれて、山岳民族がモザイク状に散在しているのは、この歴史的な特殊性にもとづく。それぞれ独立して存在するところとした山岳民族の中には、ステイエン (Stieng) やカー (Kha) のように、ほとんど純粋なインドネシア系のタイプをもち続けているものもある。というのも、この2つの部族にあっては、これまでネグリート系の侵入者たちとほとんど接触をもつことがなかったからである。また、これらとは反対に、ネグリーートの侵入者と強く混血をし、インド系マラヤ人とのいかなる類似点をもたず、黒い肌と完全なネグリーートのタイプを保っているサムレ、サオック、ペアル、クイといった部族もある。

④ 13世紀になって、全ユーラシアはモンゴルの旗印のもとにおかれた。このモンゴルによる征服のもたらした影響の一つは、シナの南部にいた民族のインドシナ侵入という形であらわれた。南シナに居たタイ族とベトナム族はそれぞれメナム河とインドシナ海岸地帯に沿って、シナ文明をもって侵入してきたのである。

カンボディアとシナとの関係は、西暦紀元はじめごろにまで遡る。シナの最初の使節は3世紀中ごろ、カンボディアを訪問している。シナとの交易は、陸路および海路により行われていた。メコン経由では、キャラバンは12日しかかからなかったし、カントン (広東) を立ったジャンクもトンレトムの河口まで15日もあればやって来た。しかし中国文明の影響が圧倒的になったのは、主として13世紀の初頭になってからであった。

モンゴルがインドに侵入し、イスラム教がインドネシアに進出した13世紀には、東南アジアにおけるインド文化はその終焉をむかえていたのである。1295年になると、カンボディアの商業はもう明らかに中国人が牛耳っていた。周達観は、カンボディアに向けて中国が輸出すべき商品リストを作っている。毎日、より多くの中国人水夫や商人が、カンボディアの地に向って行ったことは、彼の書がはっきり示しているところである。航海は時間がかかるし、どうしても女性より男性が多く乗り込むことになった。周達観は、現地で女性をめとることにより、彼ら中国人は利益を得たとも言っている。今日でも中国人はカンボディアで商業を営み、その大半がカンボディア女性と結婚している。彼ら中国人こそが、疑いなくクメール人と最も強い混血を、最も絶え間なく、しかもおそらく最も古くから行ってきた人たちであり、彼らとの混血が（ネグリートのもの）縮れた毛をまっすぐにし、黒い男女の肌を明るくしてきたのであった。

⑤ もつとあとになって、戦争目的のためにチャム、ベトナム、ラオス人が、商業のためにヨーロッパ人やビルマ人やインド人がカンボディアの地へやって来た。

17世紀にはじまるこうした新しい移民をみれば、少数とはいえ、現在のカンボディアには各種の民族が共存しているということがわかるであろう。

II クメール民族

現在山岳部に住む人たちがもち続けてきた純粋な要素をのぞけば、カンボディアの国民の基本的な表徴をとりだしてみると、すぐには難しい問題である。ずいぶん以前から、そしてまた交通路が拡充された結果、さまざまな人種もまじりあってきた。そうした上で、平均的カンボディア人像ができたといえる。

カンボディアを構成した諸要素は、まず戦争によって、自然発生的にはなくて、1つのまとまりをもつことになった。多かれ少なかれ独立しながら、諸侯によって治められてきた土地も、9世紀のはじめ、ジャヤバルマン（Jayavarman）2世の時代になって単一国家として統合された。ひき続いてこうした土地も、政治的にも、歴史的にも、また経済的にも、ほんとうに統合された

国家に形成されるに至る。

1) 政 治

1877年になるまで、カンボディアはまだ半封建的な機構を残していた。すなわちすべての税収は何人かの人たちの間で分配されていたし、国をいくつかに分ける、カンボディア語で Dey つまり封土においては、行政についても徴税についても、いわゆる大官のほしのままにされていたのである。人民のために国が何かをするといったことも、そこにはなかった。官吏や裁判官は、定額の給与を受取るのではなく、税金や、裁判で決った罰金から、勝手な額を先取りするといった有様であった。

しかしその後、抜本的な改革によって中央集権の行政機構ができ、同時に公益事業が行なわれて中央と地方のきづなを締めなおすこととなった。最近では更に、女性を含む全カンボディア人の、選挙権による国政参加、すなわち民主主義政治制によって、国内すべての州の間に、連帯の意識をもたらすに至っている。

2) 歴 史

歴史、それは伝統であり、共通の栄光と苦難の記憶であり、芸術的・宗教的文学的遺産であるといえよう。国教はパーリ語經典による小乗仏教であって、セイロン、ビルマ、タイ、ラオスと同じである。建築好きの諸王の治下にあった人々によって建てられたアンコールの遺跡は、世界的に有名である。1953年に企てられた王国独立のための十字軍は、ついに独立カンボディア再建を目ざして、国民の総力を結集したものであった。

3) 経 済

利益を追求することにもとづいた関係は、ますます緊密になってきた。平野と山地の具合よい配置は、政治的統一を促がし、生産物の交換を容易にした。

土壌や気候が多様であることから農作物の分布も地域性があり、これもまた国内での商業取引を助長した。社会的、経済的成長に伴ない、農業経済も地域的専門化を目指す傾向にあり、それはまた人間の交流を盛んにしている。

歴史とともに、こうした地理的条件も、国家の象徴である玉座の周囲に、わが国を統一することに貢献しているのである。

第 7 章 諸 民 族

カンボディアの国民は、きわめて多様な民族により構成されている。純粹のカンボディア人のほかに、原住民（少数山岳民族）、移入民および流動的な人たちが居る。現在のカンボディアに住む人たちをつぎのグループに分けてみよう。すなわちクメール人、同化したクメール人、高地クメールまたはクメール - （Khmer-Leu）および外国人である。

Ⅰ クメール人

クメール人は人口で見れば最大であり、全人口の $\frac{5}{6}$ 、すなわち約480万人をかぞえる。

体質的にクメール人はかなり身長が高く（男の平均1 m 62、女の平均1 m 50）、これはベトナムのそれをしのいでいる。また短頭で色は濃く、鼻は広くかなり大きく、額はかるく反っており、唇は厚く、髪は黒色で硬い。男は筋肉質で、下肢はずんぐりしており、女子にあってはややずっしりした感じもする。それでも整った体つきであるといえる。家族は多いが、母親はよくその任にあたっている。要するに丈夫で、中ぐらいの背丈をもち、ややずんぐりとした、しかし骨格はしっかりした、優雅ではないが均齊のとれたプロポーションと、軟弱ではない堅肥りした体格をもつ民族である。

精神面のカンボディア人は、1つにはその心に深く結びついた仏教によって、また一方は生活の容易さによって形成陶冶されてきた。一般に性格は温和、冷静で迷信深いが働き者である。もともと宗教の影響で、自分の体を大切にするという考えはない。

カンボディア人は一般に天生の職人でもなく、商売人でもない。おそらく彼らは牛車や小舟や道具を作り、家も建てられるだろうけれど、往時あれほどに開花した工芸美術の伝統も、一部のひっそりとした職人たちによって引きつがれるのみで、彼らカンボディア人はおおかた忘れてしまっている仏教徒である。彼らは漁業に一生懸命にもならないし、畜産業に精を出すこともしない。彼らが必要とする物資の生産活動をするのは、主として農業部門なのである。

Ⅱ 同化したクメール人

ずいぶん古くからカンボディアに定着し、クメール人と同じ権利と義務をもって、クメール人に同化した人たちである。すなわちマレー人、チャム人、ラオ人およびビルマ人である。

1) マレー人

カンボディア全土にわたって分布しているが、とくにコンボンチャム、カンダル両州に多い。世界中に散らばっている民族の1つであって、アジアで最大の人種、マラヨーポリネシア人種の後裔にあたる。

ほとんどのマレー人は漁民、家畜商、森林伐採業者になっている。彼らは訛りのある言葉話し、回教を信じている。

2) チャム人

遠い昔にインドシナにやって来て、10世紀までは現在のベトナムの中部に栄光の国家をきづいていた。マレー人との間には密接な血縁関係をもっており、言葉の訛りにはきわめて類似した特徴をみる。同じ回教を信じ、同じ衣服を着用し、同じ生活様式で、職業も同じである。

マレー人もチャム族も、きわめて古い昔からカンボディアの地に居り、クメール国家の市民としてみられてきた。

3) ラオ人

ラオ人またはラオス人は、ストウントレン、コンボントム、パタンパン各州にかなり多い。彼らは移民でなく、戦争のときにカンボディアの地に連れてこられた人たちの子孫である。宗教、風俗、言語、衣服もよく似ておったために、クメール人と間もなく混じり、同化することとなった。

4) ビルマ人

19世紀の終り頃、バイリン地域で宝石を含む堆積土を採掘することを目的として定着した。1900年頃になって、この小さな植民地は高度の繁栄を知る。彼らビルマ人は宝石に関した取引だけに専念する商人である。

Ⅲ 高地クメール人またはクメール人

なかば文明からとり残された民族で、原住民もしくは古い時代の侵入者の名残りともいえる。その後の侵略によって、カンボディアの周囲の山地や森林に

追いやられた人たちである。

1) インドネシア系民族

カンボディア東部に住んでいる。カー、ステイエン、ブノンの各部族である。背は低く、肌は土色または銅色である。狭頭、長頭で額は低く、瞳は黒色である。骨格はがっしりしており、体つきはしなやかで優雅でもある。体毛は濃く、髪は濃く、長く、まっすぐでふさふさしている。

彼らは原始的な森林生活者である。すぐれた狩人であり漁民であり、また火を使って開いた田で陸稲をつくっている。工業といえるものも未発達である。彼らは自然の力を敬い、迷信深い。

彼らは、その起原において民族的な共通性をもつ部族単位で集居している。部族はまた数家族からなる部落（地縁集団）に分けられる。部落は首長の権限の下にある。

2) ネグリート系民族

彼らはまったく他の民族と異つた起原をもっている。Kravanh 山脈、カンボット西部の Veal Rinh 地方、コンボントムの北部に住む彼らは、コロマンデル海岸（南インド）の起原のネグリートが先史時代にカンボディアの地に定着したその子孫なのである。

ベアル、サオック、サムレ、クイの各民族を特徴づけるものは、低い背丈、広がった鼻、とがった頬骨、青銅色か黒い肌、縮れた髪の毛である。

これらの民族の物質的な生活は、まことに不安定である。プルサット川の上流域のベアルも、Veal Rinh のサオックも、シエムレアップの北に住むサムレも、コンボントム北部のクイも、すべてそうである。

IV 外国人

中国人、ベトナム人、インド人、ヨーロッパ人が主たるものである。

1) 中国人

カンボディアを知り、そして定着した最初の人たちであった。おとなしく、計画的で、そして鋭い商取引のセンスに恵まれた労働者である彼らは、小は小売業から大は穀物、蔬菜、果実業に至るまで、すべての商業を一手にひきうけることに成功した。ほとんどすべての運輸業、ほとんどすべての地場産業は、

彼らの手中にある。

カンボディア人はこれまでずっと、中国人が自分たちと異った人種でないという見方をとってきているので、国内には今日何千人という中国人との混血児を数えている。経済的な見地からいって、こうした人々はまことに興味がある。

約35万人という中国人は、この国の経済活動の上で大変に重要な役割を演じ、のみならずまことに力の強い経済的少数民族を構成している。彼らはプノンベンなどの都市の中心部や国内郡部の中心部に、ほとんど一塊まりになって生活している。

2) ベトナム人

約30万人のベトナム人は18世紀の終り頃から定着しはじめたが、とくにフランス人植民のお眼鏡にかなって、1870年以後多数やってくるようになった。

彼らの風俗習慣、ことば、文字はカンボディア人のそれとまったく異っている。カンボディア人は何世紀にもわたって彼らと政治的に、商業的に結びついているとはいうものも、ベトナム人はカンボディア人に対してほとんど共感を示さない。

中国人とカンボディア人が一緒になることはまことに多いのに、ベトナム人と結婚することはよく思われておらず、したがってその例も稀である。

ベトナム人のつく仕事といえば、家内工業、漁業、国内の水運輸業である。彼らをきわだって特徴づけるものは、忍耐、同化しやすいことと仕事熱心なことである。

3) インド人

彼らがインドの地からカンボディアにやって来たのは、定住するためでなく、一に商売をするためにであった。カンボディアに住んではいるが、それも根なし草的な性格をもっている。しかしそのように他所者としていつもみられてはいるものも、その評価はカンボディア人により身近な中国人と同様である。

プノンベンや国内の都市の中心部で、彼らは多く主として織物や銀の商売を営んでいる。

4) ヨーロッパ人

カンボディア国民の中には、スペイン人、オランダ人、ポルトガル人の子孫

で構成された小さな集団がある。彼らの祖先は4世紀も前にカンボディアの地にやって来て、少しずつ、カンボディアの女姓と結婚しながらカンボディア国民の中に溶け込んでいった。彼らはクメールの衣裳を身につけ、この国のことばを話す。彼らが今に至るまで保っているのは、そのカソリック信仰である。

外国人としてみられているヨーロッパ人といえば、すなわち商人であり植民者であるフランス人である。移動はずいぶんはげしく、絶えず交代がある。フランス人との混血児であるユーラシア人は、官庁や商社にわずかながら雇傭されている。

第 8 章 人 口

カンボディアの人口は、約 600 万である。カンボディアの領土の外にも、約 100 万人を数えるカンボディア人が住んでいる。国外に住むカンボディア人は、たとえば南ベトナムの南部に 60 万、タイに 50 万もいる。

I 人 口

カンボディアの人口 580 万は、18 万 1 千平方 Km の土地にまばらに住んでいる。人口密度は 1 平方 Km あたり 32 人ということになる。

人口総数で見ると、カンボディアは東南アジア諸国でも最も人口の少ない国の一つである。その数はインドネシア（9,700 万）、ベトナム（3 千万）、タイ（2,400 万）、ビルマ（2,200 万）、セイロン（900 万）、マレーシア（750 万）より少ない。カンボディアより少ないのはただ 1 カ国、ラオス（260 万）だけである。

平均人口密度をみても、カンボディアは同じくラオスを除いた東南アジア諸国の中では、最後にランクされる。その人口密度はセイロン（135）、ベトナム（91）、マレーシア（57）、インドネシア（51）、タイ（47）、ビルマ（31）よりも事実小さい。ラオスのそれ（10）よりは高い。

この稀薄な人口という事実をみても、カンボディアは低開発国である。広大なひろがりをもつ土地が、なお未開発であり、無人のままになっている。もともと他面この平均人口密度 32 というのは、大した意味はもたない。というのも人口はまことにアンバランスな状態で分散しているからである。

II 分 布

80% 以上の人口が、全土の 1/3 にあたる平野部に住んでいる。残りの土地は、まことに人口が稀薄である。

1) 中央平野は最も人口稠密な地域である。それというのもここは耕作地が最もゆたかにあるし、また最も魚が多いからである。稲作地帯で見ると、水田 1 ヘクタールあたり人口は 318 人にもものぼる。（バタンパン、プレイヴェ

ン、スワイリエン、タケオ)。農園がつけられているメコン河沿いの自然堤防上では、人口密度はより高くなり、農園1ヘクタールあたり人口は420人を越える。(カンダル、コンボンチャム、コンボンチュナン)。

2) 海岸と丘陵地帯の人口はほぼ平均に近い。耕地のある部分では人口密度が1平方Kmあたり60人に達するが、一方これが森林になるとほとんど人が住んでいない。この地方の水田も中央平野のそれより肥沃さにおいて劣るし、また収量も少ない。もつとも海岸沿い地方や、カンポットの胡椒生産地帯といったところには人口の集中がみられる。

3) ところが広大な部分を占める、とくに密林に覆われた土地や山地といったところは、人口がまことに稀薄である。

Kravanh山脈、Dangrek山脈、Chhlong Luu高原やカンボディア北東部の高地帯は、ほとんど無人境といつてよい。ときとして人口密度は1平方Kmあたり1人にまでさがる。

州別の人口ならびに人口密度については、下の表に示すとおりである。

| 州 | 人口 | 人口密度 (Km ² あたり) | 水田1ヘクタールあたり 人口密度 |
|-----------------|---------|-------------------------------|---------------------|
| RATANAKIRI | 38,700 | 5 | 10 |
| STUNG-TRENG | 34,500 | 5 | 11 |
| KRATIE | 136,400 | 5 | 10 |
| KOMPONG-CHAM | 819,500 | 81 | 418 |
| KOMPONG-THOM | 322,400 | 12 | 341 |
| SIEMREAP | 312,700 | 14 | 99 |
| BATTAMBANG | 551,900 | 26 | 185 |
| PURSAT | 180,300 | 16 | 390 |
| KOMPONG-CHHNANG | 273,000 | 53 | 490 |
| KOMPONG-SPEU | 307,400 | 43 | 277 |
| KAS-KONG | 38,700 | 10 | 30 |
| KAMPOT | 352,800 | 27 | 298 |
| TAKEO | 467,200 | 122 | 222 |
| KANDAL | 706,400 | 196 | 460 |
| PREY-VENG | 491,600 | 122 | 243 |
| SVAY-RIENG | 287,000 | 108 | 205 |
| PHNOM-PENH | 403,500 | 10,000 | — |

Ⅲ 人口増加

1900年以降、カンボディアの人口は止むことなく増加し続けてきた。右表に示すとおりである。

| 年 | 人 口 | 備 考 |
|------|-----------|---------|
| 1900 | 1,102,000 | |
| 1914 | 1,823,279 | |
| 1921 | 2,402,585 | センサスによる |
| 1926 | 2,535,000 | " |
| 1931 | 2,803,000 | " |
| 1936 | 3,049,000 | " |
| 1941 | 3,471,000 | |
| 1946 | 4,137,000 | |
| 1951 | 4,374,000 | 統計による |
| 1958 | 4,740,000 | " |
| 1959 | 4,845,000 | " |
| 1961 | 5,749,000 | " |

なお年齢別、性別人口分布はつぎのとおり。

| 年 令 | 実 数 | | | % | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|-------|-------|-------|
| | 合 計 | 男 性 | 女 性 | 合計 | 男性 | 女性 |
| 0 - 4 | 897,000 | 452,000 | 445,000 | 18.5 | 18.6 | 18.3 |
| 5 - 9 | 704,000 | 359,000 | 345,000 | 14.5 | 14.8 | 14.2 |
| 10 - 14 | 562,000 | 288,000 | 274,000 | 11.6 | 11.9 | 11.3 |
| 15 - 19 | 475,000 | 234,000 | 241,000 | 9.8 | 9.6 | 9.9 |
| 20 - 24 | 395,000 | 193,000 | 202,000 | 8.2 | 8.0 | 8.3 |
| 25 - 29 | 354,000 | 172,000 | 182,000 | 7.3 | 7.1 | 7.5 |
| 30 - 34 | 301,000 | 146,000 | 155,000 | 6.2 | 6.0 | 6.4 |
| 35 - 39 | 261,000 | 129,000 | 132,000 | 5.4 | 5.3 | 5.4 |
| 40 - 44 | 225,000 | 111,000 | 114,000 | 4.6 | 4.5 | 4.7 |
| 45 - 49 | 195,000 | 97,000 | 97,000 | 4.0 | 4.0 | 4.0 |
| 50 - 54 | 158,000 | 79,000 | 79,000 | 3.3 | 4.3 | 3.3 |
| 55 - 59 | 123,000 | 63,000 | 60,000 | 2.5 | 2.6 | 2.5 |
| 60 - 64 | 84,000 | 42,000 | 42,000 | 1.7 | 1.7 | 1.7 |
| 65 - 69 | 52,000 | 26,000 | 26,000 | 1.1 | 1.1 | 1.1 |
| 70 - 74 | 33,000 | 16,000 | 17,000 | 0.7 | 0.7 | 0.7 |
| 75 - 79 | 18,000 | 9,000 | 9,000 | 0.4 | 0.4 | 0.4 |
| 80 | 8,000 | 4,000 | 4,000 | 0.2 | 0.2 | 0.2 |
| 合計 | 4,845,000 | 2,420,000 | 2,425,000 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 0 - | 2,163,000 | 1,099,000 | 1,064,000 | 44.6 | 45.3 | 43.8 |
| 15 - | 2,571,000 | 1,266,000 | 1,305,000 | 53.0 | 52.3 | 53.8 |
| 65 | 111,000 | 56,000 | 56,000 | 2.4 | 2.4 | 2.4 |

横軸に年齢別、性別の人数、縦軸に年齢をとってみると、いわゆる年齢ピラミッドのグラフが得られる。このピラミッドはその底部がきわめて広いが、これはカンボディアの出生率が高く、人口もまた急速に増加していることを物語っている。

カンボディアの人口は、他のアジアおよびラテンアメリカで最も年少である国と同じくらいに若い。こうした国々では子供の占める割合が高く、老年の割合が低い。つぎの表によってそれがよくわかる。

| 国名 | 0~14才 | 15~64才 | 65才以上 |
|---------|-------|--------|-------|
| カンボディア | 44.6 | 53.0 | 2.4 |
| フィリピン | 44.1 | 52.8 | 3.1 |
| ベールー | 44.1 | 52.9 | 3.0 |
| セイロン | 40.7 | 57.4 | 1.9 |
| インド | 37.4 | 59.0 | 3.6 |
| 日本 | 32.8 | 61.9 | 5.2 |
| アメリカ合衆国 | 30.4 | 61.0 | 8.6 |
| フランス | 24.4 | 63.6 | 12.0 |

人口増加率は2.3%にのぼる。この率はかなり高いものである。それはまた衛生の面における進歩につれて、増え続けている。平均寿命は44才である。カンボディアの人口は25年ないし30年ごとに倍増していく。

年率2.3%で人口が増えるとして計算すると、カンボディアの人口は西暦20

00年に1,400万人に達する見通しである。

Ⅳ 都市人口と村落人口

本質的に農業国であるカンボディアでは、人口のほとんどが村落のそれである。すなわち地方に住んでいるわけである。高度に工業化した、たとえば日本のような国になると村落人口は全人口の半分以下になっている。

大部分のカンボディア人は農民であって、地方に住んでいる。あるものは水田耕作者であり、あるものは農園をつくる。どうしても必要な工業製品との交換が可能な農作物のほか、彼らは昔ながらに必要なタバコや棉ややしといった、さまざまな作物を栽培している。反対に都市部の人口の大部分は外国人である。中国人、ベトナム人、中国人とカンボディア人との混血の人たちで、彼

らは小規模工業や商業に生きている。数年前から、多くのカンボディアの農民が村を離れ、町で稼ぐようになってきた。彼らは未熟練労働者やシクロの運転手になっている。こうした人たちは都市でも居心地の悪い、衛生条件の悪い下町に、詰めこまれたように住んでいる。

人口約50万をもつ首都プノンペンのはかには、カンボディアには人口10万を越す都会はない。

V 移出・移入

カンボディア人は国外へ出て行かない。というのも国がゆたかだし、住民が好き勝手にできる土地がたくさんあるからである。しかしながらある地域、たとえばトンレトムの自然堤防などでは、人口過密地区がみられる。土地はきわめて細分され、一家族の平均保有面積は $\frac{1}{2}$ ヘクタールである。米作地帯でも貧しい農民が1ヘクタール以下の土地しかもたない場合があるが、おおかたの農民は1ヘクタール以上の土地所有者である。

こうした細分化された土地がある反面、もし農民が生まれ故郷を離れることを承諾し、また開発に必要な資金を与えることによって離村を奨励するならば、植民できるであろう土地もまだまだ広く存在している。こうした国内移住は、農村部の福祉を拡大するための方策として興味がある。

最後にもう1つ、いわゆる季節移住とよばれる、最も貧困な階層によって行なわれる移動がある。農閑期すなわち農耕をする月以外の期間に、小規模経営農民や農業労働者が都市に出て労働者となったり、森林地帯に赴いて樵夫になったりする移動である。彼ら季節労働者は、農作業の季節になると、また彼らの村へと帰って行く。

ゆたかさで知られるカンボディアは、移入民にとってはより抜きの国である。移入民の主たるものは中国人とベトナム人で、彼らはよくまとまった組織をもち、経済面においても金融面において有力な少数民族となっている。彼らの数は絶えず増加している。それは南の国境がまったく人為的なものであるカンボディアでは、認可制で移入民を割当てるといってもその監理が難しいことに原因がある。

VI 国外のクメール人

100万人のクメール人が国外、タイとベトナムに住んでいる。

1) タイのクメール人

最も数の多いタイのクメール人は、カンボディアの北側の国境に沿って住んでいる。その生活域は平行する2本の線、すなわち Dangrek 山脈とメコン河右岸の支流である Nam-Moun の間である。タイの3つの州、 Sourin, Borirarn, Koukhan の南側の農民すべてがカンボディア人である。古クメール帝国はまた、数多くの堤防や溜池、105にのぼる都市、クメール様式の寺院や建造物といった遺跡をこの地に残している。

またかなりの数の集団は、タイの首都バンコクと Au Chreau の間に住みついている。彼らは19世紀の中頃、タイに移植させる目的でカンボディアで捕われた人たちの子孫である。

タイのコーラート (Korat) はカンボディア語の Angkor-Reach をつづめた名前であるし、Nam-Moun の名前もカンボディア語の名前である Prey Moul 川に由来し、Prachim も昔のカンボディアの「西の都」を意味する Pachem の古名であることに注目したい。

タイ国にいるクメール人は約50万人、そのほとんどがカンボディア民族の国民性をそっくり保ち続けている。タイ国ではクメール語の学習は禁じられてはいるものの、彼らはタイ語のほか、本国よりもなお古典的なアクセントで古いクメール語の標準語を話し続けている。

2) 南ベトナムのクメール人

この国のクメール人は、メコン河の西にある Chaudoc, Travinh, Rachgia, Soc Trang, Hatien の各省と Tayninh 省に姿を見せる。ベトナム人は、彼らが現在の地にやって来る以前からあるクメール文明の全遺跡を、執念深いまでに破壊したものであったが、なお南ベトナムにはいくつか残っている。

これらのクメール人は、ベトナム人による治政下にあっても、彼らのことば、衣服、信仰をそっくり保存することを忘れていない。彼らはその数400をかぞえるクメール様式の寺院の周囲に集落をつくり、また子供たちにクメール語を教育し続けている。南ベトナムに居るクメール人は60万人にのぼり、そのほとんどは農業と小さな商業に生きている。

第9章 生活様式

一国民の文明の程度は、職業がどれだけ分化しているか、彼の生活する土地を整備するについて、どれだけの工夫がこらされているかではかられる。カンボディアは開発途上にある国であるため、いわゆる低開発国と開発国で見られる生活様式のほとんどを見出しうる。

生活様式はつぎの6つに分類できよう。

1 山地および森林、もしくは半遊牧生活

往來の不自由なこの地域の住民には、遊牧または半遊牧の生活をおくる部族民（クメール）が含まれる。

1) 土地所有

遊牧民が行なう耕作では、農地を個人の所有物にすることはできない。その耕作は山林を焼いた跡に種子をまき、もしくは植えつけを行ない、2回から3回収穫をするというやり方である。そうして地力が減退した土地は放棄されてしまう。こういった必要性から、新しい林の部分が絶え間なく損われていく。こうしたシステムは本質的に遊牧民の耕作方法であり、同時に森林と土壌を破壊していくのである。

2) 民 家

遊牧生活を営んでいるために、クメールたちの家はつねに一時的に身をおく所でしかない。それは高床式のロングハウスで、屋根にはカヤを用いるが作りは簡素で、間仕切りも窓もない。ときどきクメールは小屋のそばに庭をこしらえるが、そこに果樹を植えることはほとんどない。これも遊牧生活では移動がはげしいことによる。

3) 集 落

移動をする生活であるために、遊牧民の農耕では住民がその居住地を小邑（小さな集落）に分散していることが要求される。これも焼畑の範囲内にとどまっているためである。もっとも時には周辺が物騒なので、防備を施した村落に集中せざるを得ないこともある。

一般にこうした集落はそれ相応の生活をもっているが、何か集団で事にあたるために、同じ部族の他の集団と一緒になることもある。

4) 経済活動

遊牧民たちの農耕は密林の中か、土壌がかなり深ければ喬木の生えたサバンナ林で行なわれている。冬のはじめ、彼らはブッシュを払い、大木を切る。この季節の終りに彼らは火を放ち、その灰をばらまく。掘り棒で穴をつくり、女性たちが何粒かの朶をその中へ落としていくだけでいい。同じ時、同じ土地に彼らはとうもろこしをまく。とうもろこしは稲よりも先に実るのである。かぼちゃもいも類も、同じように作られる。雨季の終りになると収穫となるが、それは数カ月も続く。

自給自足するために、収量の知れた焼畑耕作のほか、クメールーは各種の木の葉、果実、根や茎の採取や狩猟、ときには魚とりにも精を出す。手かせいぜい鋤を使うほどの耕作では、豚、山羊、鶏以外の、たとえば牛の飼育等はともできない。

さまざまな手段を購じてはいるものの、生産はやはり細々としており、人たかも貧しい。こうした原始的農業のもつ大きな欠点は、人が少なくとも広大な土地が必要とされるということである。山林を伐採してゆくという不幸なまた重大な事態を休止させるか、あるいはそれをできるだけ少なくさせるためには、彼ら山地の民族をより肥沃な河谷地域に定着させ、より進んだ耕作の方法を教えることが必要になるであろう。

II 洪水の影響をうける稲作地帯

1) 土地所有

ここでは一部の土地の肥沃度は毎年の洪水によって復原され、伝統的な手法で稲が毎年つくられる。この地帯での土地制度としては不動産申告制度にもとづく所有もしくは地籍保存制度による財産としての土地が認められる。

2) 民 家

杭上の家屋は裕福な人の場合には木瓦で葺いてあり、貧しい人たちの場合はそれがわら葺き（カヤの屋根、やしの葉か編んだ竹の壁）となる。家屋を杭上に、つまり高床にして建てる理由は5つある。浸水避けること、土の湿気を避け

ること、虫や危険な動物を避けること、床下が農器具や収穫したものの保管に役立つこと、そして家畜をそこにかくまえることの5つである。カンボディアの民家は、つねに土の上に建てられる中国やベトナムの民家と趣きを異にする。

3) 村 落

家屋は、その大きさは色々だが、かたまってブム(Phum)つまりムラと呼ばれる集落を形づくる。ムラは緑の木立のまん中にあり、その中には1つかあるいはそれより多くの寺院がひっそりとかくれている。

ムラはしばしば小高い土地、トゥール(Tuol)とカンボディア語で呼ばれる高台の上に建てられる。それは川岸にあったり、道路ばたにあったり、水場の近くだったりするが、水田からはほど遠くないところに建てられる。ブムは行政単位ではなく、地理的・社会的な実在であって、その境界は必ずしも明確ではない。

4) 経済活動

この稲作農民の仕事の主たるものは、水田の中の労働である。田を耕やし、種子をまき、雨季の間作物の管理をし、乾季のはじまる頃に収穫をする。農民たちの使う道具はほとんど同じである。昔ながらの鋤、曲がった形の鎌、そして牛車。こうした道具は能率がよくないから、開拓も小さな面積しかできない。カンボディアは圧倒的に小農経営の多い国である。

その栽培方法も昔ながらである。肥料を使わず、直播きか移植、作物を害するものの退治もせず、それはまた水田を速くいため、収量は少なく、小農ゆえに収入は小さく、季節的な移動、または都市へのつきつめた移住がみられる。

鋤を使う農業は、耕作に家畜飼養を伴うのが特色である。カンボディアの農民は耕作者であると同時に、農作業に必要な牛や水牛の飼育者でもある。鶏や豚を飼うことによって、年間収入も増える。農閑期に入ると彼らは家内工業があるいは町に仕事を見つけて生活する。もし彼が川のそばに住んでいたら、家庭で消費するための魚とりもする。

一般的にいって、色々と努力はしているものの、彼らの生活水準はかなり低い。自然堤防上で農園を営む農民に比べれば、それははっきりと低い。

Ⅲ 自然堤防上の農地

1) 土地所有

クラチエからベトナムとの国境に至るメコン沿いの土地はすべて、農園での畑作地帯である。

高くなった土手を除いて、自然堤防上の土地とその外側の土地は、毎年のトンレトムの氾濫で水びたしとなり、水が運ぶ泥土で肥やされる。この肥沃な土地では年2回にわたってさまざまな耕作が行なわれ、その収穫も高い。この自然堤防上の土地の所有制度は、そのきわだった土地細分によって特色づけられ、ときには $\frac{1}{8}$ ヘクタールといった土地所有もみられる。もつとも土地が細分されていても、そこからの収穫が水田地帯の5ないし6倍であってみれば、農民にとってはとりわけ苦痛にもならないのである。農地の分割は土地の最大傾斜線に沿って行なわれているが、これは地形がそれを要求すると同時に、異った内容の作付をする時には、土地利用を傾斜面の方向に区切って行なえることよっている。

2) 民 家

そのタイプは水田地帯の民家のそれと同じであるが、とり入れた作物の乾燥に使われるためにベランダが大きくなっている。そのうえ水田耕作よりも収入が多いことから、ここでは木瓦で葺いた家がより頻繁にみられる。また自然堤防上の住民の生活のゆとりは、同様にその衣生活からも、家庭の中の設備からもうかがわれる。

家屋は自然堤防上でもまったく浸水の心配のないところに、つねに建てられる。果樹の緑の中に、こうした家は隠れるように建てられている。

3) 村 落

洪水と減水がくりかえされる土地柄であるから、ムラを構成するのは土手に沿って切れ目なく続く家々である。

自然堤防上の交通路といえば、すべてのムラを結ぶ、しばしばただ1本の細い道である。この道も、自然堤防がよく崩れるような所では、ときどき道筋がかわる。

メコンは理想的な水上交通路であり、また人の往来と収穫物の流通のためのよきマーケットでもある。河岸に人口が多いのも、こうした理由によるのである。

る。

4) 経済活動

この土地の農民は二期作を行なっている。

- 5月の最初の雨から実際には9月にならないとみられない出水までの増水期の耕作で作物は80日から90日で成長するとうもろこし、緑豆。

- 乾季、10月から5月までの減水期の耕作では、水をあまり必要としない作物が選ばれる。たばこ、棉、緑豆、とうもろこし、ごま、落花生等。重粘土の土地では乾季稲の栽培も行なわれる。

多収穫とはいふものも、こうした耕作、とくに増水期の耕作には危険がつきものである。洪水がもし早く来たら、もうそれで収穫は無になってしまうからである。

畝の面からみても、その価値からみても高い収穫のこうした耕作のほかにも、彼ら自然堤防上のカンボディア人は魚とりも、森林の伐採もまた商取引にも精を出す。これもメコン河が他に例をみないすぐれた水上交通路であることによっている。こうしてメコン河に沿った土地に住む農民は誰よりも自然の恩恵に浴しており、水田に働く同胞よりも楽な暮らしをしているのである。

N 高原の畑作地

1) 土地所有

ここは平野よりも高く、そして肥えた紅土地帯であって、最近になって高い収穫が得られるバナナ、緑豆、大豆、棉、ゴム樹の栽培によって開発の手が加えられるようになった。密林に覆われた紅土地帯は、農民の手によって、あるいは機械を使って開墾され特許ゴム樹園となっている。古くから拓植されたところではないから、土地の面積も数ヘクタールから数千ヘクタールとかなり大きく、その土地も幾可学的な形をしている。

2) 民 家

農民たちが入植してきた地域では、民家は水田地帯やメコン河沿いの土地に建てられたものとさして変らない。しかし生活にゆとりがある証拠に家は木造である。またしばしば遠い地方からやって来た人たちが最近になって拓いた土地である証拠に、その家々¹をとりまく果樹の緑はみられない。

洪水のない高地に建てられてはいても、家屋はやっぱりしっかりした木材を使った高床式である。彼らは農機具や収穫物を、床下に保管している。

広大なゴム園の中の家屋は、煉瓦造りか木造である。

3) 村 落

小綺麗な外観をもつムラは、国道に沿って並んでいる。長方形につくられた土地だから、道路に垂直に切って行けば、できるだけ多くの家族にもみあう広い面積の屋敷地がとれる。耕地はこうした住宅地の奥に、あるいは所有者の住居から数キロも離れてある。村落の大小は、どれほどの土地を耕地にすることができるかによる。

大きな特許ゴム園では、植林会社が恒久的な家（いささか大量生産風に建てられた）と公共建築物（診療所、学校、市場など）をもった本物の小さな村落をつくったものである。水や電力も、ゴム園の労働者の家庭に供給されている。

4) 経済活動

テール・ルージュ（紅土）地帯には2種類の農業がある。

- 1年生の作物の栽培。緑豆、大豆、落花生、棉等。これらの栽培では乾季に土壌がむき出しになるので土地がいためつけられる。

そうなれば収穫もおちるし、何年かごとに、土地を休閑することも必要になってくる。

- 多年生植物の栽培。ゴム樹、バナナ、オレンジ、胡椒等。土壌保全という面から、王国政府は家庭単位でゴムを栽培するように勧めている。

適当な間隔をおいて、年にしばしば数回にわたる収穫ができるこうした農業を営んでいるのだから、入植者の生活レベルが高いのも当然である。

V 水上生活者

1) 土地所有

このカテゴリーに入れられるのは、漁業もしくはその取引にのみ生きる人たちの集団である。彼らは魚の多い水路の岸辺に住み、何者にも束縛されず、洪水が来れば移動し、また魚をとりに出かけ、他の所で働いたりする。彼らは一般に土地所有の観念がなく、しばしば季節的な移住をしながら生きている。

2) 民 家

彼らは魚の乾燥に使う広いベランダのつい、洪水を避けるための高い高い、ときに十数メートルにもなる床の家か、洪水とともにその位置をかえる舟の家に住んでいる。

高床の家がたいへん簡素につくられているのに比べると、舟の方はよっぽど設備がよくできている。というのも彼らは、ほとんどこの人工的な生活空間の中で一生を送るので、それを飾りたてたくなるのであろう。

3) 村 落

多かれ少なかれ一時的な集まりにすぎないこうした家々は、水上村落であり、さまよう村落ではあっても、正確な意味での村落とはいえない。こうした村落は洪水が来るとどこかへ行ってしまふし、そのサイズは1人1人の住民のお好みで大きくも小さくもなるからである。

トンレサップ湖の水位が高い季節には、彼らは湖をさけて洪水林の近くに身を寄せ、漁獲のシーズンである乾季になると、河口（Bacprea, Prek Tol, Khbal Tor 等）や湖の中ほど（シエムレアップのPhnom Kromに近いChong Khneaの人たち）に湖上集落が生まれる。

トンレトム河岸の水上生活者（舟に住む人がほとんどであるが）の場合は、同じ河岸に定着している村民と共同生活を送っている。

こうした小さな水上村落はあたかも小型のヴェニスを形成しており、そこでは水が交通路であり、舟が唯一の輸送手段なのである。

4) 経済活動

このカテゴリーの住民の生活の糧といえば、漁獲とその副産物、そして魚の養殖である。

漁業のできない季節には、彼らは家庭で消費するための魚をとったり、浮稲や野菜（西瓜やかぼちゃ）・果樹を栽培したり、蜂やワニを捕まえたりして生きている。彼らの舟はまた、運搬料が支払われるならば、色々な商品やメコン河で採取された砂や礫等を、低水位期に積むこともできる。つまり川を行く小舟は水上生活者の家であると同時に、水路を走る輸送手段でもあるというわけである。

VI 大小の都市

かなり大きな集落といえるのは、地方あるいは都市域の中心にあって、郡の役所所在地や州都となっている。

他の東南アジアの国々におけると同じく、経済的、行政的な中心都市であるブノンベンや目に見えて拡大されるシハヌークビル港（訳注：副都市に指定されている）以外の、市や郡部の中心地は、おおよそその規模が似たりよったりである。

町というものは、あるときは大きな陸上、水上商業路に沿って、あるときは荷物の積み換え地や渡し場、商品の交易地に自然発生的に生まれ、あるいはまったく人為的にできるものである。ブノンベンの場合、農産物や工産物が往来する「4本の腕」に近く建てられたし、他の多くの国内の中心地は、たとえばソボンやSkounのように2本の主要道路の交点に、また Peam Chikang にみるように Peam ということばが先行する場合は川の河口に、コンボンチャムのようにコンボンという名前がついているときは河岸で、そこへ1本の道路が到達しているというような場所に、あるいは単に経済的に重要な地域をつぎる国道沿いに（Bathey のように）、立地しているのである。

また町ができた当時に果していた機能が、その後になって果せなくなった場合は、人たちがより有望な町へと立ち去って行くから、やがてその町は廃墟へと滅びてゆく。とくに第二次大戦の前と後ですっかりかわった Svaydaunkeo のような国境の町についてはとくにあてはまる。人為的な町の例としては海水浴場の町ケップ、高原の保養地ボコール、キリロムがある。最後に大きな工場が設置されたことによって、飛躍的に大きくなった町がいくつかある。製紙工場ができた Ohhlong、セメント工場が置かれた Chakrey Ting がそうである。

都市が大きくなり、住民の動きも活発になると、問題が多く出てくる。いわく食糧の補給の問題、じん芥の処理、道路をどうするか、広場の整備等々である。ブノンベンは急速に発達し、今日の商業・行政の一大中心都市となった。この都会は機能的な都市計画の原則にのっとり、整然と秩序正しく成長を続けている。

第 10 章 政治と行政機構

カンボディアは立憲君主国である。17のケット(Khet)(州)に分かれ、ケットはスロク(Srok)(郡)に、郡はクム(Khum)(村)にそれぞれ分かれる。

1 政治機構

1947年5月6日に公布された憲法(1956年改定)に、カンボディアの政治機構が規定されている。

1) 国家元首

憲法の定めるところに従い、国王は国家最高の首長であり、その人格は神聖にして不可侵であるとされている。国王は法律を公布し、内閣総理を選任し、総理の推せんした閣僚を任命する。また王は、文武の位階を設定しまた授与し、裁判官諮問会議の提案により裁判官を任命し、恩赦および減刑を行なう権利をもつ。

国王は王国軍の最高統帥官でもある。また外国との条約・協定を締結し、国民議会の議決に従ってこれを批准する。

2) 立法権

立法権は国王の名において、二院すなわち下院または国民議会および上院または王国会議によって行使される。

国民議会は4年ごとに改選されるが、その方法は25才以上の男女国民による直接普通選挙による。議員定数は77名で、法案ならびに予算案を議決する。

王国会議は勅選議員と、40才以上の国民から制限選挙により選出された議員により構成される。これらの議員のほか、2名が国王により選任され、2名が国民議会により同議會議員以外から選出される。8名はケット(州)およびKrung(地区)の代表による間制限選挙により、また8名は各種職業の代表であって、これは直接選挙により、最後の4名は国家公務員の中からそれぞれ選出される。王国会議の合計議席数はすなわち24である。上院議員の任期は4年である。上院は国民議会から提出のあった法案についての意見を表明

する。

2) 行政権

行政権は国王の名において、王国政府を構成する内閣によって行使される。内閣は最大限16名の大臣(長官を含む)で組織される。内閣は政府の政策一般に関して国民議会に対して責を負い、各大臣は個人的行為に関しては内閣総理大臣に対して責を負う。

また閣僚は、内閣がその機能を果たしている際におかした犯罪、違犯ならびに重過失については刑法上の責を負う。

内閣は毎週、国王もしくは総理出席のもとでの全閣僚会議または検討会議の形で閣議をもつ。

3) 司法権

司法権は国王の名において、等級および管轄を異にする各裁判所がこれを行使する。

裁判は国王の名において、治安裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院および最高裁判所によってとり行なわれる。

上記の3権のはかに、本原的な機関、すなわち国民大会があり、これは国家の利益にかかわる事柄についての知識を直接国民に供与する。大会は6カ月に1回プノンベンで開かれ、すべてのカンボディア国民は男女を問わず討論に参加することができる。

カンボディアの政治機構は、民主主義国家のもつそれであることがわかる。

II 行政機構

行政面よりみたカンボディアは17のケット(州)と特別市(プノンベン、シハマークビル、ケップ、ポコール、キリロム)に分けられる。各ケットはスロク(郡)に分かれ、スロクはクム(行政村)に分かれる。クムは2つまたはそれ以上のプム(ムラ)を含み、国の行政単位を構成する。

プノンベン特別市は首都であり、12の区に分けられている。近郊のPoch-entongやBeng Pum Peay等を併せながら、プノンベンは拡大しつつある。

プノンベン特別市や各州の長はChauvai-KrungもしくはChauvai-Khetと呼ばれる知事である。Chuvai-Khet(州知事)はChauvai-Srok(郡長)

およびMekhum（村長）をその指揮下においている。

行政は首都プノンペンに集中している。プノンペンにはすべての権力が集っており、公共機関の各部もここに集っている。プノンペンはまた文化的中心でもあり、学芸学校、国立図書館、大学等がある。最後にプノンペンは交通路・航路の十字路にあたるということから、経済的な中心都市でもある。こうした理由でプノンペンの人口は増加の一途をたどり、現在50万人に達している。

17州はつぎのとおりである。

ストウントレン州 — 州都 ストウントレン。

ストウントレン、Thalaborivathの2郡。

ラッタナキリ州 — 州都 ロンバット（Lomphat）。

Voeunsai, Andong Peich, ロンバットの3郡。

クラチエ州 — 州都 クラチエ。

クラチエ、Sambaur, Chhling, Snuolの4郡。

モンドルキリ州 — 州都 モンドルキリ。

Koh Nhek, Chbar, O Raingの3郡。

コンボンチャム州 — 州都 コンボンチャム。

Kompong Siem, Prey Chhor, Kassutin, Kang Meas, Choeng Prey, Thbaung Khmum, Krauchmar, Mimot, Srey Santhor, Stung Trang, Chamcar Leuの11郡。

コンボントム州 — 州都 コンボントム。

Kompong Svay, Sandan, Rovieng, Barai, Santuc, Staungの5郡。（ママ）

シエムレアップ州 — 州都 シエムレアップ。

シエムレアップ、Puok, Sauthnikom, Chikreng, Kralanhの5郡。

バタンバン州 — 州都 バタンバン。

バタンバン、Sangker, Maung, Mongkolborey, Au Chreou, ソンボン、Banteay Chmar, Praneh Preas, Phnom Srok, Bar Thbaungの10郡。

- ブルサット州 — 州都 ブルサット。
Bakan, Krakor, Phnom Kravanh の3郡。
- コンボンチュナン州 — 州都 コンボンチュナン。
Babaur, Rolea Peir, Tukphos, Kompong Leng,
Kompong Tralach の5郡。
- コンボンズブウ州 — 州都 コンボンズブウ。
Samrong Tong, Phnom Sruoch, Kong Pisey,
Thpong, ウドンの5郡。
- コッコソ州 — 州都 ケマラプーミンビル (Khemarak Phoumin Ville)。
コッコソ、Sre Umbell の2郡。
- カンボット州 — 州都 カンボット。
カンボット、Chhuk, Banteay Meas, Kompong Trach,
Preynop の5郡。
- タケオ州 — 州都 タケオ。
Treang, Bati Kirivong, Kas Andeth, Samrong,
Prey Krabas, Tramkak の7郡。(ママ)
- カンダル州 — 州都 タクマウ (Takhmau)。
Kiensvay, Saang, Khsach Kandal, Mouk Kompoul,
Loeuk Dek, Kas Thom, Kandal Stung, プノンベン、
Lovea En, Ponhea Lu の10郡。
- ブレイグエン州 — 州都 ブレイグエン。
ブレイグエン、Peam Ro, Komchay Mea, Peareang,
Kanchriech, Sithol Kandal, Peam Chor, Baphnom,
Kompong Trabek の9郡。
- スワイリエン州 — 州都 スワイリエン。
Romduol, Svaytep, Romeas Hek, スワイリエンの4郡。

カンボディアは合計17の州、95の郡、1,160の村に分けられる。(訳注
:上記の17州のほかにブレア・ビヘア州 (Preah Vihear) オドールメンチ
エイ州 (Oodar Mean Chey) が新設され1968年現在19州である。)

第 11 章 農 業

カンボディアは何よりも農業の国であり、土地からの生産はこの国の経済ではまず第一の役割を演じている。

それぞれ異った農耕、そして農民の生活パターンは、土地の性質と地形に密接に関連している。また、たとえカンボディアの地理的構造が農業に適しているとしても、一方では人口も $\frac{1}{8}$ にはぼあたる低い平野の中の、季節的に洪水を受ける地域だけを開發するにとどまっているのである。

カンボディア農業を特徴づけるものはつぎのようなものである。すなわち米の単作、小農自作、家族単位の粗放的經營、信用制度や労働手段のないこと、収量がわずかで平均収入が低いことである。

I 食糧作物の栽培

1) 米

カンボディアで生産されるものでは、最も主要なものが米である。130万ヘクタールの土地で栽培され毎年収穫される米の量は150万トンにのぼる。年間ヘクタールあたり平均1.2トンの生産となる。

栽培方法も農機具と同じくかなり未発達である。肥料や選抜された種籾を使うことは、ほとんど知られていない。またその収量の少ないことにも驚かざるを得ない(日本のヘクタールあたり収量は約7トンである)。

カンボディアで栽培される稲には2つの種類がある。雨季作の稲と乾季作の稲である。前者はもっとも広く栽培されている。というのは雨季に洪水を受ける土地でよく生長するからである。この稲には3つの種類がある。早生、中生と晩生である。乾季作が作られるのは、洪水のあともほとんど1年を通じて水がひかないような低い地方においてである。

バタンバンとコンボンチュナン州では直播栽培が普通であるが、他の地方では苗の移植が必要とされている。収穫はまったくの手作業で行なわれる。

米作の中心地はバタンバン、プレイヴェン、タケオ、スワイリエン、コンボンチャムの各州である。通常の年では、カンボディアでとれる米のうち30

万トンは輸出できる。

2) とうもろこし

カンボディアで作られる2番目に重要な穀物である。戦前のとうもろこし栽培は25万ヘクタールの土地で40万トンを収穫していたが、現在では栽培面積も狭くなって、8ないし10万トンしか生産されていない。

2種類のとうもろこしが作られている。1つは白とうもろこしで国内消費用、1つは赤とうもろこしで、こちらは輸出用である。作付は年2回で、重要なのは4月から8月にかけて、もう1回は12月から3月にかけてである。ヘクタールあたり平均収量は在来種で1.3トン、ハイブリッドで1.7トンである。

主産地はトンレトム沿いの諸州であって、なかでもコンボンチャムとカンダルの2州は全生産量の $\frac{3}{4}$ を供給する。

3) 油料作物

油をつくる作物は色々ある。落花生は自然堤防の砂地に作られる。地元では落花生を豆のままか、落花生油にして消費している。年間の生産高は1万トンから2万5千トンくらいである。

ごまは高地もしくは自然堤防上の農地で作られる。ごまには白ごまと黒ごまの2種類がある。一部は菓子製造または食物として消費され、残りは輸出されている。

ひ麻(唐ごま)はコンボンチャムとカンダル両州のトンレトム沿いの土地で作られ、その生産高は6万トンにのぼり、すべて国内で消費される。

ココヤシの実の仁は菓子として、また料理用に使われる。カンボディアはコブラも、石鹼の製造に足るほどのココヤシ油も生産していない。

4) 甘蔗と砂糖やし

カンボディアの甘蔗(さとうきび)は、生のままで消費される品種だけであって、工業用つまり加工して精製糖を作るための品種は栽培されていない。

砂糖やしはタケオ、カンダル、コンボンズブウ、カンボット、コンボンチュナン、コンボンチャムといった州の道路沿い、または土手の上ではほとんどいたる所に生えている。1本の木からは60ないし70kgのやし砂糖(楓糖)がとれ、これは飲物としても珍重される。年間のとれ高は3万トンから4万トンといったところである。

5) 胡椒

胡椒の栽培はカンボット、タケオ両州に集中している。現在コンボンチャムの紅土（テール・ルージュ）地帯で栽培実験が行なわれている。その生産は市場価格の変動と病害に関係している。

現在は市場価格が高くなっており、業者はせっせとその栽培面積を大きくしているところである。年間1,500トン生産され、ほとんどが輸出される（1920年には6千トンに達したこともある）。

6) その他の食糧作物

緑豆は自然堤防上で栽培され、菓子製造用に使われたり、もやしとして消費される。年間の生産高は2万トンで、うち1,500トンが輸出されている。

大豆も緑豆と同じく自然堤防上で作られ、その年間生産高は1万8千トンにのぼる。大豆とそれからつくられる醤油がカンボディア料理にしめる地位は大きい。

果樹栽培はさまざまで、どこの土地でもみられる。バナナ（とくにコンボンチャム）、マンゴー、ドリアン（カンボット）、柑橘類（バタンパン）、パイナップル（カンボット、コンボンチュナン）、パパイヤ、チクル、竜眼などである。

蔬菜は大きな都市の周辺や、コンボンチャム、カンダルのメコン河沿いの土地で作られている。ナス、カボチャ、西洋カボチャ、キャベツ、サラダ菜、瓜類、ピーマン等である。

II 工業用作物

まず第一は、輸出用ゴムを生み出すゴム樹がある。

1) ゴム

ゴム樹の栽培がはじまったのは1921年であった。現在その栽培面積はコンボンチャム、クラチエとラッタナキリの3州で4万8千ヘクタールにおよんでいる。

ゴム樹は7年で樹液を出す。根に近いところの樹皮に、らせん状の溝をつくり、その下にラテックスをうける受け皿を置く。ラテックスは15%の固体ゴムを含んでおり、輸出される前に少しばかり加工される。

ゴム樹の栽培は他の作物に比べるとまだ新しく導入されたばかりだともいえるが、カンボディアのゴムはこの国の経済において重要な地位をしめている。生産高も年を追って増えており、15年間に1万5,420トンから4万1千トンへと伸びている。

2) 繊維作物

この中には棉、桑、カボック、ラミーとジュートが含まれる。

棉はクラチエ、コンボンチャム両州の自然堤防上の土地で栽培されている。棉には1年生のものと多年生のものとの2種類がある。作付面積は市場の需要によって変動する。たとえば1943年の作付面積は1万1千ヘクタールで生産高は972トン、1954年にはこれが2千ヘクタール、75トンとなっている。多収穫品種が導入された結果、適切な管理をすれば1,500トンから2千トンはとれるようになった。(1961年は9千トンであった)

桑は養蚕用に、カンダルとプレイベン州のメコン河沿いの土地で栽培されている。1ヘクタールの桑の木で年間生糸20噸というところである。年間の生糸の生産はほぼ20トンである。養蚕振興の計画が、いま実施されつつある。

カボックはカンダルとコンボンチャムの自然堤防上、または紅土地帯で栽培されている。その面積は5千ヘクタールに達し、バンヤ(カボックの繊維)の生産は2,500トンである。

ラミーは価値ある繊維で特に漁具に多く使われる。川沿いの土地か高地で栽培され、その作付面積は500ヘクタール、チャイナ・シルクと呼ばれるこの繊維の生産高は年間200トン。

ジュートはまだ作付面積が大きい。ジュートの繊維は米袋やさまざまなロープの製造に用いられている。バタンバンにジュート織物の工場が建設されたので、今後生産は伸びると思われる。

3) タバコ

減水期に河川沿いの土地で作られ、その面積は8万ヘクタールにおよぶ。タバコの栽培は人手も要るし、世話もたいへんである。生産高は6千トン、そのうち $\frac{2}{3}$ は土地の肥えたコンボンチャム州が出している。カンダル州は全体の $\frac{1}{4}$ 、その残りは他の州、とくにクラチエ、コンボンチュナン州で作られる。

9月に種子をまき、3月から5月にかけて収穫される。摘取りは葉を1枚1枚とってゆくのである。そのあと葉は山積みされ、好ましい色になるまでいわ

ば醗酵され、それから乾燥、最後に細かく刻まれる。

タバコの在来種は数多い。戦争中は輸入物の白色タバコの補給ができなかったため、栽培業者はグァージニア種を育てるようになった。戦争が終るとこの品種の生産は見棄てられたが、1949年にこんどは外貨の流出を少なくするという目的で再開され今日におよんでいる。

Ⅲ 畜産

カンボディアの畜産は家畜の質およびその数についてよく知られている。この国の畜産は家族単位で行なわれ、大形の家畜飼養の目的は農作業に使うという点に向けられている。

1) 牛

カンボディアの牛は一般にヤセ型であってその重量は350kgから500kgぐらいまでの間である（ヨーロッパの畜肉業者の扱う牛では800kgから1トンぐらいである）。

その数は130万頭に達している。畜産はとりわけカンダル、コンボンチャム、パタンパンの各州に局限されている。畜肉としての年間消費は1万2千頭で、約3万頭分のストックは輸出可能である。その余剰分は全部ベトナムが吸収している。

2) 水牛

水牛は沼沢の多い地域に住む。その数は43万頭でとりわけブレングエン、コンボントム、コンボンチュナンの各州に多い。どっしりした、控え目でおとなしい、そして農作業にはよく耐える獣である。

余剰分としての2万頭がベトナムやフィリピンに輸出される。

3) 豚

食肉用に飼養され、その肉は高く賞味されている。全国に63万頭いるが、とくにカンダル、スワイリエン、タケオ、コンボンチャムで多く飼われている。

ベトナムへの輸出は年間10万ないし13万頭で、そのほとんどすべてがスワイリエン州から出されている。

4) 家禽

鶏、あひる、がちょうを合わせて約300万羽が飼われている。スワイリエ

ン州だけでそのうちの50万羽をもっている。卵の生産は国内消費に何とか間にあうという程度である。1年で約60万羽がベトナムへ輸出されている。

5) 他の動物

他の家畜としては馬(2,600頭)、山羊(1千頭)、羊(540頭)と象(430頭)がある。

第12章 天然資源

これらの富は土地の表面もしくは地下に自然の状態で存在し、人間の求めるところにより、または人間のよりよい生活のために開発され利用されてきた。あるものは林産物や狩猟鳥獣、魚類といった更新が可能な資源、また他のものは石油、石炭や色々な鉱物のように更新不可能な、つまり開発によっていつかは涸渇するであろう資源である。

自然によって更新可能な資源を多く授けられたカンボディアも、鉱物資源には十分恵まれているとはいえない。

1 林産物

1) 900万ヘクタールにおよぶ森林は、実にカンボディアの半分を覆っている。森林で覆われた面積がとりわけ大きいのはストウントレン、クラチエ、コンポントム、プルサットとカンボットの各州である。バットアンバン、コンボンチャム、コンボンズブ、シエムレアップ、コンボンチュナンの各州では、森林は多くもなく、また少なくともない。しかしトンレトムのデルタに位置する、つまりブノンベンより南の州では森林の恩恵がまるっきりない。

カンボディアの森林は、経済生活において、すぐれて大きな役割を演じている。土壌と水の保全と同時に、林産物の生産についても国民の需要に欠かせぬものとなっている。事実木材は家事炊事上の唯一の燃料資源であり、また地場産業用の燃料としても用いられている。用材は家屋の建築に、漁業に、家具製造に使用されている。

2) 森林の伐採は、監督官庁の管理のもとに伐採業者によって行なわれる。森林伐採権の売り渡しは、毎年の入札によって行っている。開発の対象となった森林や保護林については、長期の契約も認められている。藤や樹脂等の森林副産物についてはより頻りに、特別な認可システムによって伐採・採取が行なわれる。

すべての林産物について、賦課金が徴収されている。

伐採は主として人力で行なわれる。材木の切り出し、つまり搬出にはトラックが利用されている。消費地へは林道を行くトラック、鉄道を走る貨車、水路

を行くいかだといった輸送方法がとられている。

3) 森林生産は国内の需要を充たし、さらに輸出もされている。

- 工作用材は年産30万立方 m 。高級家具用材 (Beng, Thnong, Krakas, Neang Nuon), 建築用材 (Koki, Phchek, Sokram), 一般家具用材 (Don Chem, Sralao, Beloi), 一般建材 (Chhoeteal, Khlong, Thbeng, Trad) などがある。

- 工業用材としては釣竿、胡椒の木の支柱、鉄道の枕木、梱包、マッチ工業などである。

- 燃料材、木炭材はそれぞれ40万立方 m と2万5千トン。これは加熱したりあるいは動力機関の燃料として使用されている。

- その他の林産物としては竹、籐、松やに、木精、カルダモウム、屋根葺きなどに使うカヤなどがある。

4) 流通

主たる木材市場はプノンペンで、10月頃になると毎年メコン河を下って、またコンポントム州からのいかだが到着する。

プノンペンに着いた木材は、そのほとんどが伐採業者に前渡金を支払っている荷受人のもとに引き取られる。工作用材は8 m から12 m の長さの丸太の形になっている。

II 漁獲

淡水漁業は、10月から5月までのトンレサップ湖およびメコン河岸の住民の、仕事の大部分を構成する。川から湖から水がひきはじめると、その生活は充実し活気づく。トンレサップ湖は、世界での最も魚の多い湖の一つで、1平方 km あたり10トンの漁獲がある。

漁法には2種類があって、その一つの小規模漁業では大した人手も資本もいらないが、大きな規模の漁業になると、前者とは対照的に高価な漁具もいるし、資本もかかる。小規模な漁業は陸釣りもしくは小舟を使い、漁具も簡単なもの(もり、投網等)である。大規模なものになると大きなせき止めをしたり、大きな網を用いることになる。

淡水魚の年間漁獲高は、15万トン台である。その $\frac{1}{2}$ の5万トンは鮮魚のま

ま消費され、残りは昔からある方法で乾燥され、または燻製にし、そしてまたブラホック（魚餅）、魚醬にも加工される。副産物としては魚油と、肥料として、また家禽の飼料として使われる魚粉がある。

国内需要を充たしてなお、カンボディアの漁獲は近隣諸国への輸出が可能で戦前は2万8千トン、最近では7千ないし1万トンの干魚が国外に出されている。

タイ湾に沿った地域では、多くの漁民が沿岸漁業に従事している。年間3万トンと推定される鮮魚の水揚げは、そのほとんどが国内消費またはタイへの輸出となっている。

Ⅲ 鉱物資源

系統的な探査が行なわれていないので、カンボディアの鉱物資源は現在ほとんど開発されていない。

鉱物資源を出す地域をつぎの5つにまとめることができよう。

1) バイリン地区

宝石の採掘地で、鋼玉（ルビー、サファイア）が豊富であるのが特色である。バイリンのルビーは少しぶどう酒色がかかった赤色で、まったく透明である。サファイアは濃いブルーであるが、その色合いにはむらがある。

バイリンの宝石は、ずい分古くから住みついているビルマ人植民たちによって採掘されている。

2) コンボントム地区

鉱山としてはたいへん内容の充実した地区であって、鉄鉱石と金を含む鉱石が知られている。

とくに Phnom Dek の鉄鉱石は優秀で、埋蔵量は5百万トンと推定され、鉄の含有率も平均60%と高い。

沖積鉱床に含まれる金は、Phnom Chi と Phnom Lung の周辺で採掘されている。

3) カンボット地区

石灰岩と磷酸塩が豊富である。石灰岩には4種あり、白い方解石の脈が介在する黒い石灰岩、黒く緻密な石灰岩、明るいグレーの緻密な石灰岩、明るいグ

レーで上質、均質の石灰岩である。石灰岩は建設事業用、石灰およびセメントをつくるために採掘されている。

4) プルサット地区

Tasay 区からバゴダ石と呼ばれる彫刻に使う石がとれる。カンボディアの工人は、この石で工芸品を作っている。

第 13 章 工 業

工業は今日に至るまで、農業に比してきほど重要な役割を果たしていない。しかし独立してからの国の積極的な努力で、事業所数は500から2600以上にまでなった。カンボディアには重工業と呼ばれるべきものはなく、また軽工業も最近になっておこってきたもので、それはもっぱら国内で得られるものからの消費材の製造に向けられている。いっぽう伝統的な家族規模の工業は、時流を超越して、なかなか興味ある工芸品を作り出している。

I エネルギー資源

カンボディアは、現在のところ石油も石炭も産出しない。もっとも最近の調査によれば、こうした資源があるという可能性が認められている。

薪および木炭が、唯一の国産エネルギー資源で、交通機関（船、機関車）や加工工業（醸造業、陶業、煉瓦工業）の燃料として、また発電所においても使用されている。木炭の製造は年間2万5千トン、薪のそれは40万立方mにのぼる。

発電所は首都とすべての州庁所在地にあって、主として照明のための電力を供給している。なかでもプノンペンの発電所は最も大きく、全発電量の $\frac{8}{10}$ を占めている。これらのほかにはゴムの精製工場の中に発電所がある。1945年から1960年の間に、年間発電量は5百万kWhから5千8百万kWhへと10倍以上の伸びを見せた。石油製品はまったく輸入にたよっており、スタンダードオイル、シエル石油、カルテックスアジア石油の各社により供給されている。1959年における石油製品の消費は、ガソリンが6千6百万リッター、重油が1,900万リッター、ガスオイルが1,300万リッター、ディーゼルオイルが2万5千トン、灯油が3千トンであった。

石炭と乾溜してつくるコークスは、高熱が得られるので鉄工所や鋳物工場で使用され、年間30トンばかりが輸入されている。

Ⅱ 食品工業

精米工場は粳を加工し、白米・碎米・糠をつくる。粳のままの輸出が禁止された1951年以降、とくに発達した。1951年には47であった工場数は、現在680となっている。ここでいわゆる精米工場は、輸出米用の大規模な企業のをいい、国内消費用の米を機械で摺る、粳摺り業とは区別しなければならない。大手の工場はブノンベン、バットアンバン州、プレイヴェン州にある。

醸造工場では主として碎米、とうもろこし、砂糖やしの樹液からアルコールをつくっている。全国12の工場で、年間1千万リッターのアルコールが生産されている。最大規模のものはRussey Keo（ブノンベン市内）にある工場ですべての生産量の60%をまかない、その他はバットアンバン、ブルサット州 Laolo-ksar, プレイヴェン州Banam, コンボンチャム州のChiheとSuongにある。

ビール工場、清涼飲料・シロップ・炭酸水の工場および製氷工場はブノンベンや地方に散在している。最大規模のものはインドシナビール醸造・製氷会社といい、4百万リッターの清涼飲料、3万3千リッターのシロップ、3万1,500トンの氷を製造している。バットアンバンもまた、相当量の清涼飲料生産地である。

製糖工場は砂糖やしの糖液を加工して粗糖をつくる。家内工業的な製糖所が34、大規模な製糖工場がブノンベンに1カ所あり、この工場だけで年間850トンの砂糖をつくっている。なお精製されないまま固めたやし砂糖の生産は年間3ないし4万トンに達している。王国合作社（OROC）と国家企業庁は、砂糖やしの糖液を原料とする近代的な製糖工場設立のために協力している。

搾油工場は落花生から食用、工業用の油をつくっている。工場はブノンベンに3、ウドン（Oudong）に4、Chiheに2、Banamに3ある。生産高は1,380トン。

塩漬加工工場では小魚を原料にして魚醬をつくる。42工場のうち15工場はブノンベンにあり年間生産高は4百万リッター。

ほかにそのほとんどがブノンベンであるが、醤油、ブラホックの工場もある。

Ⅲ 繊維工業

カンボディアの農民は日頃、必要に応じて綿織物や絹織物をつくっている。

すべての繊維の中でも綿は取引をひきおこす最も重要なものである。つまり織物用の糸の製造、敷布、綿織物の製造等である。原料はどこでも得られる（木綿の製造は年間1,800トン）。推定によると織物工、染物職人、その他の労働者をあわせて1,500人が家内工業的な繊維工業に従事しており、年間20万mの綿布を生産している。カンダル、コンボンチャム、タケオ、プレイグエンの各州では、手機織が行なわれている。

コンボンチャムには本格的な綿の紡織工場があり、ここでは年間800トンの綿糸と500万メートルの綿布がつくられている。

絹については手機を扱う織工が200人以上おり、13の作業所で270基の力織機が動いている。原料は一部分国内でとれ（年間20トン）、一部は輸入によっている（同じく50トン）。絹布にして年間生産高は百万メートルに達すると推定されている。

最後に家内工業的な、上に述べた以外の繊維工業として、い（蘭）草の敷物、ラタニアの葉の袋、ココナット繊維の綱、漁網の製造をあげておこう。麻袋をつくる工場を建てようという計画もある。

IV 機械工業

家内工業的な鍛鉄業は、カンダル、コンボンチャム、タケオ、コンボントム、クラチエおよびシエムレアップの各州で行なわれている。コンボントム州において、この仕事を特技としているのは少数民族のタイである。採鉱、鉄分の抽出、鍛鉄のいづれも、ずいぶんと原始的な方法によっている。年間の生産もまことにわずかである。

銅鑄造業は、タケオ州のTram Khnarやコンボンズブウ州のウドンにみられ、ブロンズの鍋やたくみに装飾をほどこされた鉢等をつくっている。

多くの機械工場（規模は小さい）は、そのほとんどがブノンベンにあって、機械製品や部品を製造している。自動車・自転車修理、電器具修理、鋳物機械部品製造、諸機械製造、金風製寝台製作、日用品の製造といった作業所がある。

メコン河に沿っては、蒸気船の修理工場もある。

V 化学工業

ゴムはラテックスを加工してつくられる。その製造はまずラテックスの上ずみを取り去り、ろ過し、その後凝固させてから圧延機にかける。これを切断し、乾燥し、圧縮して包装し、輸出される。この時ゴムは蒸煙したシート(RSS)かクレーブ(ゴム革)の形で出荷される。国内5カ所のプランテーションにある5つの工場では年間3万4千トンのゴムを加工し、そのうち1万5千トンは蒸煙したシートである。

ブノンベンにはゴム製品、すなわちゴムぞうり、ゴム管等をつくる事業所が20ほどある。

油脂(落花生油、牛脂、やし油)は、その大部分が石鹼やろうそくの製造にまわっている。16カ所の工場(うち12カ所はブノンベン)で、年間2,400トンの石鹼をつくっている。

その7工場がブノンベンにある製革工業は、月間4千枚の皮革を国内用になめし、靴革、鹿皮、ボックス皮等を製造している。

3つのたばこ工場はブノンベンにあり、年間700トンのたばこの葉を原料に、15億本の巻きたばこ、7万箱のきざみたばこを製造している。

唯一のマッチ工場はブノンベンにあり、生産能力は年間70本入り840万箱で、輸入マッチとはげしい競争を演じている。

ブノンベンにある製紙工場は廃紙、古袋などから旧式の製法で包装紙、衛生用紙、カートンをつくっている。クラチエ州のChhlongにある近代的な製紙工場では原料に竹、わらを使用し、各種の紙を年間5千トン生産している。

VI 製材・木工業

その数200を越える製材工場と、それ以上ある人力にたよる製材所で、皮付きの樹木が挽かれる。大規模な製材工場は、ブノンベンとパットアンにある。ブノンベンには大製材工場が6つあり、輸出向けの用材を加工しその能力は1日20ないし60立方mである。なおカンボディア全土の製材量は、ほぼ5万立方mと推定されている。またカンダル州のDey Ethには合板工場があって、国内産の木材を原料に、指物用の合板を生産しており、その能力は年間90万立方mに達している。高級家具製造業ならびに日用家具をつくる指物業

はこの州にもみられるが、とくにブノンベン、パタンバン、クラチエに多い。

良質の籐からは色々なものがつくられるが、なかでも家具セットはその形の良さと軽いということから需要も大きい。

その他には木製ジャンク製造、松やにのトーチ、竹かごやざる製造をあげることができよう。

W 非金属工業

非金属工業にはさまざまな種類がある。

まず Chakrey Ting にあるセメント工場では石灰岩を加工して年間5万トンのセメントをつくっている。その生産が軌道に乗るのは1964年のことになるだろうと思われる。

石灰製造工場も同じく石灰岩を焼いて生石灰をつくっている。カンボットおよびパタンバンにある50余の炉によって、年間5ないし6千トンの生石灰が生産されている。

煉瓦ならびに屋根瓦工場は135あって、1億2500万個の煉瓦および孔あき煉瓦、3500万枚の平屋根瓦、棟瓦を製造している。主要生産地はカンダル、プルサット、パタンバンの3州である。

ブノンベンにあるガラス瓶工場は、瓶、薬用小瓶をつくっている。製法は旧式で製造過程のロスも大きい。

カンボットの塩田は5万ヘクタールの規模をもち、年間平均5万トンの塩を生産しているが、困ったことにその売行きがはかばかしくなく、危機に陥っている。

砂岩を用いた挽白の製造はコンボントム州やコンボンチャム州でみられる。年間生産は数百個。

土器製造業はコンボンチュナン、カンダル、コンボンズブウ、タケオ州が主産地で、2千世帯がこれに従事している。年間2百万個の素焼鍋と水指、かめ、土かまど（七輪のようなもの）をつくっている。

ほかにはセメントタイル、ブロックの工場、プルサットには大理石彫刻の作業場があることをつけ加えておく。

Ⅷ その他の工業

皮の切抜きはシエムレアップに特有の家内工業で、各種パネル、衝立、シェード等たくみに装飾されたものがつくられている。

シリコン、サファイア、ルビー等の宝石のカットはバイリンおよび主としてブノンベンで行なわれている。ビルマ人のみがこの作業を専門としている。

金銀細工に従事しているカンボディア人は多い。装飾品、たばこ盆、鉢、刀の柄等で、一般に伝統的なデザインでつくられている。

このほか米粉製造、べつ甲細工をあげることができよう。

第 14 章 交 通 路

地域の産業と商業の発展は、交通路の発達、拡張に大きく依存している。かくて開発された平野部では、道路、水路、鉄道路線がそなわっているが、山岳地方はといえばほとんど近寄りがなく、交通路もまず未発達である。

1 水上交通路

カンボディアの地図を見ていると、その地形が水上交通に大きな寄与をしていることに感心させられる。すなわちトンレトムとトンレサップが国の中部にその位置を占め、その支流は奥深い谷にまで達している。

涸れることがなければ、すべての水の流れは水路として、多くの人たちに利用されてきた。航行可能なこうした水路の最大のものが、すなわちトンレトムであり、トンレサップであり、そしてバサック河なのである。

1) 船路としての河川

メコン河においては、年間を通じてクラチエから海まで、川舟すなわちジャンク、ランチ、曳船の航行が可能である。海洋船については、吃水が45m以下であれば、1年中ブノンベンまで廻行ができる。

メコン河の主要な支流には、急な流れの部分があり、これがほとんどすべての舟航を不可能にしている。低水位期になると溜上り、氾濫期になるとその流れの強さ、沖積物の流出、それに水位の変化がめまぐるしいといった理由で、舟の往来が危険である。しかしこうした河川も、雨季のいかに流しなどには利用されている。

つぎにトンレサップとバサック河については、1年中Chhnoc Trouまでは航行が可能である。低水位期になると、コンボンチュナン州のChhnoc Trouの浅瀬で、大湖とブノンベンを結ぶ水運が事実上できなくなる。なお高水位期であれば、ジャンクやランチもブノンベンから太湖に注ぐ主要河川の中流までは廻ることが可能である。

ブレイグエンとタケオ両州の河川では、しばしば浚渫を行なった結果、舟の往来が可能となった。

2) 舟 船

船は動力船と非動力船に分けられる。前者は50ないし300トンの、そのほとんどが船籍を首都とするもの、すなわち船用ディーゼルエンジンを積んだ最新型の高性能船、それに外国からブノンベンにやって来る貨物船、オイルタンカー等である。メコン河のブノンベン-コンボンチャム-クラチエ間、トンレサップのコンボンチュナ-太湖間には、同様に頻繁な曳船輸送がみられる。

非動力船はジャンクのすべてを含み、大きさは区々であるが流れや風を利用してしながら移動する。ジャンクは乾魚、粉、用材、とうもろこし等の運搬に利用される。10トン以下のジャンクは航行の規制を受けないし、年中内陸の奥深くまで航行するため、大切な輸送手段となっている。10トン以上については登録が必要になり、ブノンベンにある船舶登録当局の監督下におかれる。

II 道 路 網

何年間にわたって治安のよくない時期があったが、その間補修がじゅうぶん行われなかったために、道路網はとくに傷めつけられた。また1952年10月の暴風雨、1956年と1960年の大洪水によって多くの土手の上を走る道路に損害が出た。

つまり現在の道路網は、よいというにはまだほど遠いというわけである。道路は現状の交通量には狭すぎ、信号や道路標識も不十分でいくつかの橋梁は危険でさえある。わだちや溝、いわゆる「ろばの背」道や、なまこ板状の道がしばしばみられる。道路により輸送される物資もだんだんと重いものになりつつある現在、木製の橋等はすみやかにコンクリートのものにかきかえねばならないであろう。

1) 幹 線

カンボディアで道路網がよく発達しているのは中央平野においてである。国内の道路は国道が2,800Km、州道が1,200Km、林道が2,000Kmある。このうち1,600Kmはアスファルト舗装がしてあり、2,000Kmは割石舗装、残りは踏み固められた土の道である。

国家予算で管理されている国道は観光や主要貨物の運搬用の大道路である。ブノンベンを起点とし、各州に放射状にのびている主要国道はつぎのとおりで

ある。

1号線。ブノンベンからNeak Luong、スワイリエン経由ベトナム国境まで。全長167Km。

2号線。ブノンベンからタクマウ、タケオ経由Tinh Bienまで。全長137Km。

3号線。ブノンベンからカンポット、Prey Nop経由シハヌークビルまで。全長約260Km。

4号線。コンボンスブウ経由のシハヌークビルまで。全長226Km。

5号線。ブノンベンからタイ国境のAu Chreouまで(ブルサット、パッタバン経由)。全長408Km。

6号線。ブノンベンからコンポントム、シエムレアップ経由シソボンまで。全長386Km(ただしブノンベン-Prek Kdam間を除く)。

7号線、13号線。ブノンベンからコンボンチャム、Mimot、クラチエ、ストゥントレン経由でラオス国境まで。なお7号線は180Km、13号線が280Km。

15号線。Neak Luongの渡しからスワイリエン経由Chupまで。全長90Km。

州の予算で維持管理が行なわれる州道は、たとえば国道に至る横断路であり、また僻地の中心地に達する進入路である。

林道は林野庁によって開発され管理される。一般の往来にも利用されるが、本来の目的は林産物の輸送である。

2) 自動車輸送

1950年以降道路による物資の輸送は3倍になり、その重量はますます増えつつある。

トラックの数は1950年には1,600台であったものが現在は5千台になっている。3トンから10トンの大型トラックは、農産物、木材、工業製品の長距離輸送に活躍し、一方小型のトラックは500ないし700kgの商品を積んで近距離の往復輸送に使われている。

一地方から他の地方へと乗客を乗せて走る公共バスは、1950年には575台であったが現在は1千台を突破している。バス路線の経営者たちは、より乗心地のいいバスを配車するようになってきているが、いかんせん道路状況が悪

いために、バス旅行はまだ辛いものである。

最後に道路輸送には、1万2千台ばかりの観光のための車輛が含まれることをつけ加えておこう。

3) 鉄 道

カンボディアは東南アジアの中でも、その鉄道路線の延長が最も短い国の一つである。ただ1本の、プノンベンと Au Chieou を結ぶ385 Kmの鉄道によって西部地方の農・林産物が首都に運びこまれている。すなわち鉄道の密度は100平方Kmあたり0.22 Kmである。ちなみに日本ではこれが5.40 Km、インドでは1.51 Kmに達している。

鉄道路路といっても、狭軌の鉄道が1本あるのみである。急行では最高時速60 Km、普通列車ではそれが45 Kmである。駅は38ある。この鉄道はタイ鉄道に接続され、バンコックに至る。

カンボディアの鉄道は公社組織である。年間収入はほぼ5,800万リエルで、うち貨物収入が $\frac{1}{5}$ となっている。対キロ乗客数は4,800万人、年間27万6千トンの貨物を運ぶ。Au Chieou からプノンベン向け貨物は23万9千トン、うち70%までが農産物、15%が林産物である。またプノンベンから Au Chieou 向けは3万3千トン、うち33%が工業製品となっている。このようにその方向別輸送量はアンバランスで(1:7)、このことは開発の困難さを物語っているといえる。

4) 航空輸送

主要空港として Pochentong(プノンベンの西10 Km)、シエムレアップの両空港がある。

Pochentong では1958年9月25日に、巾40 m、全長2,400 mの新滑走路ができ、一般公開されている。なおこの滑走路の強度は一車輪あたり30トンである。地元航空会社がプノンベンと他の国々の首都を結ぶ空路の経営にあたっている。タイの会社である Thai Airway、ベトナムの Air Vietnam、そして Royal Air Cambodge である。ロイヤル・エアー・カンボージュは1956年7月創立、資本構成はカンボディア政府60%、フランス航空(Air France) および Air Azur あわせて40%となっている。

国際路線もプノンベンを通過する。キャセイ航空、フランス航空、チェッコ

スロヴァキア航空、ビルマ航空、アリタリア・イタリア航空といったところである。長距離航空機を配するこうした航空会社により、プノンベンにはアジアおよびヨーロッパの各国首都と結ばれている。

V 港 湾

カンボディアの港の大きさは、国の大きさにみあっているといえる。主要港というべきものはプノンベン港のみである。他の河港は地方の運輸だけである。シハヌークビルの海港がその役割を果しはじめるのも、間もなくである。

1) プノンベン港は河港であると同時に海港でもある。ちょうど国の中央部の、大きな水路の交叉点に位置し、東北諸州に結ばれ、また大湖とベトナムにつながっている。自動車道路や鉄道がいかにか発達しようとも、プノンベンはつねに重要な河港であるし、またそうあり続けるであろう。1948年3月、外洋船がはじめて入港したその時から、プノンベン港は海港ともなったのである。

港はトンレサップ（河）の右岸に建設されている。河岸にけい留されるのみならず、船舶はコンクリート製の700mの岸壁をもつ30の浮き棧橋をも使用することができる。10棟の倉庫はそれぞれ15m×30mのもので、河川運輸に利用されている。また、かなりの数の私営の倉庫があることもつけ加えておかねばならない。

海港は税関前の河岸の部分、河港として使われている部分の上流に位置している。4つの浮き棧橋は、長さ60mの船舶の横づけを可能にしている。税関区域内の2棟の倉庫は、とくに海運のために使用されている。

この港のかなり上流には、2つの石油販売会社の私設棧橋があって、タンカーのけい留に使われている。

最後に、港の6km上流にコンクリート製の棧橋があって、貨車への直接荷扱、プノンベン—Au Chreou 線（鉄道）への直結を可能にしている。

同港の輸送状況はつぎの表のとおりである。

| | 出 港 | 入 港 |
|---------------|----------------------------------|--------------|
| 河 川 輸 送 | | |
| ラ ン チ (台) | 7 1 7 | 7 1 3 |
| ジ ャ ン ク (台) | 2 4 6 0 | 2,4 4 0 |
| 貨 物 (ト ン) | 2 9 0,3 2 4 | 2 2 5,4 3 1 |
| 海 上 輸 送 | | |
| 貨 物 船 (隻) | 2 7 1 | 2 8 3 |
| タ ン カ ー (隻) | 2 3 | 2 5 |
| 貨 物 (重 量) | 2 4 0,8 2 2 t. | 5 1,7 2 2 t. |
| 貨 物 (金 額) | 1,060,000,000 <small>リエル</small> | |

2) その他の河港は、現在に至るまで簡単な整備しか行なわれていない。
 コンボンチャムは、メコン河右岸の、3 Kmにわたるブノンベンにつぐ大きな河港である。港はまだ立派とはいえないが、その改良工事がたゆまず進められており、州のゆたかさもあいまって、将来は相当の量の輸送が可能になるであろう。

トンレベット (Tonle Bet) はメコン河の左岸、コンボンチャムの対岸にあって、コンボンチャム港の仕事を補足している。この港は、国内東北部への石油を扱う港であり、またとくにラテックスの積出し港として重要である。

コンボンチュナンは、低水位期におけるトンレサップの終着港となる。

3) 海港としてよく知られているのはReamとシハヌークビルの両港である。

Ream港の停泊地はちょうどコンボンソム湾入口の東南部、岩の多い岬に位置している。南に大きな島があって、南からの波よけとなっている。深さ6 mの投錨地で2千トン級の船は入港できる。つまり小さな沿岸航海船にしか利用されえず、5千トン級の遠洋航海船を入港させるには新しい水路を開き、それもよく管理されなければ不可能である。

こうした理由から、1954年にコンボンソム (シハヌークビル) の地がカンボディアの海港開設の地として選ばれたのであった。地点の選択は、浜辺に近い水深10 m以上の水路のあるところと決った。これならば大きな外洋船もじゅうぶん停泊できると考えられたからである。

第 15 章 貿 易

今日に至るまで、カンボディアは外国へ農産物を売り、海外から工業製品を買い入れるという国である。もっとも現在は、こうした産物を国内消費もしくは輸出にまわす前に、いくつかの国内工業が加工するようにはなった。それでもなお、やはりカンボディアの経済生活は外国に依存するところが大きいことは事実である。とりわけ農産物というのは海外市場の価格に敏感であるし、最も必要な輸入物資の補給となると、相手国との関係のよしあしに依るところが大きい。

外国貿易はつまり、カンボディアにとって最も根本的な必要性そのものである。こうした何があんでもという性格があるにもかかわらず、外国貿易はなお個人商社、商店の手中にあり、彼らは投機のために、また中間マージを多くするためにカンボディアの生産者には低価格を強い、輸入品を売る段になるととんでもない価格にしているというのが実情である。

1 輸 出

カンボディアの主要輸出品は農産物とその他の天然資源で構成されている。

1) 輸出品目

通常の年で、量の大きいものの順に品目をならべるとつぎの表のようになる。

| | 重 量 (トン) | 金 額 (1,000 リエール) | % |
|--------|-------------|---------------------|------|
| ゴ ム | 38,300 | 790,000 | 38 % |
| 米、二次製品 | 242,000 | 781,000 | 37 % |
| とうもろこし | 107,000 | 193,000 | 10 % |
| 魚 | 19,000 | 106,000 | 6 % |
| 木材、林産物 | 105,000 | 80,000 | 4 % |
| 畜 産 品 | 5,500 | 59,000 | 3 % |
| 胡 椒 | 1,400 | 29,000 | 1 % |
| た ば こ | 2,000 | 28,000 | 1 % |
| そ の 他 | 30,000 | 309,000 | 14 % |

輸出額は合計 2 億リエルにのぼる。そのうち米とゴムとで $\frac{3}{4}$ を占めている。

2) 相手国

フランス（金額にして 31%）。ゴム、とうもろこし、胡椒を購入。

東アジアのホンコン（同じく 16%）、マレーシア、日本、中国（人民政府）ラオス。モンスーンアジアの国々は、全輸出額の 33% を吸収している。

アメリカ合衆国（同 25%）。アメリカは主としてゴムを買っている。カンボディアのゴムの $\frac{1}{5}$ はアメリカへ流れている。

その他の相手国はオランダ、ドイツ、連合王国、フィンランド、スウェーデン、エジプト等。

II 輸 入

カンボディアはとりわけ工業製品を輸入する。量は小さいが、金額は大きい。

1) 主な輸入品は

食料品（金額にして 14%）。たばこ、飲料、乳製品、コーヒー、砂糖、茶、野菜、各種かんづめ類。

鉱産品（同じく 14%）。セメント、石油製品。

繊維製品（同 17%）。約 $\frac{1}{2}$ が綿製品。ほかに絹製品、各種レーヨン、麻袋など。

機械機器（同 17%）。自動車、工作機械、一般機械。

その他の工業製品（同 38%）。化学薬品、ゴム製品（タイヤ等）、皮革・紙製品など。

合計輸入額は 3 億 4 千万リエルである。こうしてみると輸入品が主として消費財であることがわかる。食料品、繊維製品、高級車、すべてそうである。にもかかわらず工作機械などの生産財は、輸入のたった 6% ほどにしかすぎないのである。

2) 主な相手国は

フランス（金額にして 15%）。機械機器、貯蔵食品、各種のアルコール飲料などを供給。

東アジア諸国（同 44%）。ホンコン、マレーシア、日本、インドネシア、インド、タイ、フィリピン。

アメリカとくに合衆国（同8%）。

その他連合王国、ドイツ、エジプトなど。

輸出入状況の百分比による比較はつぎの表のとおりである。

| 項 | 目 | 輸 入 | 輸 出 |
|-----------|-------------|-----|-----|
| 品 目 別 | 食 料 品 | 14% | 56% |
| | 一 次 産 品 | 24% | 44% |
| | 工 業 製 品 | 62% | — |
| 大 陸 別 | ア メ リ カ | 8% | 25% |
| | オ セ ア ニ ア | — | — |
| | ア ジ ア | 44% | 33% |
| | ヨ ー ロ ッ パ | 47% | 36% |
| | ア フ リ カ | 1% | 6% |
| 国 別 | ド ル | 9% | 25% |
| | ス タ ー リ ン グ | 30% | 26% |
| | O E C E | 33% | 40% |
| | 他 | 28% | 9% |
| ブ ロ ッ ク 別 | 西 側 | 72% | 96% |
| | 社 会 主 義 | 24% | 4% |
| | 中 立 | 4% | —% |

一般に植民地的経済の国の貿易はやや赤字貿易で、外国援助がこれにともなう為替のアンバランスを是正していることが多い。カンボディアではそれにもまして、国家経済開発計画の実施と、開明的な指導者であるノロドム・シハヌーク殿下の保護のもとに、外国貿易はますます好調にむかっている。

カンボディアの地名等にあられることば

| | |
|----------------|---------------|
| 1. Au または O | 小川、溪流 |
| 2. Beng | 池、湖 |
| 3. Chamcar | 畑、庭園、菜園 |
| 4. Dangrek | 唐竿、天秤棒 |
| 5. Kas | 島 |
| 6. Khet | 州 |
| 7. Khum | 村 |
| 8. Kompong | 港、渡し場 |
| 9. Leu | 高い、高地の |
| 10. Phnom | 山、小山、丘 |
| 11. Phum | ムラ（大字に相当） |
| 12. Prek | 川（Au より大きい） |
| 13. Prey | 林、植林 |
| 14. Sap | 淡水の |
| 15. Se（ラオス語） | 川 |
| 16. Srok | 郡 |
| 17. Stung | 川（Prek より大きい） |
| 18. Thom | 大きい |
| 19. Tonle | 河 |
| 20. Tonle Thom | 大河（メコン河） |
| 21. Trapeang | 水たまり、小池 |
| 22. Veal | 平原 |

参 考 文 献

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

カルダモウム山脈

カンボディアで最もよく知られているのは、道路網がそれを貫き、メコン河の兩岸と大湖の周囲をとりまいて広がる大平野である。最も多くの人が住み、最もよく耕やされているのはこの地域である。

ところで古い国であるクメール (Khmer) がまたまったく異った様相を呈しうるのはそれ以外の地域である。カンボディアの西部全域に、複雑な起伏をもった山々が広がっている。そこは森林帯である。人口は稀薄で、人々は古い慣習を残している。村落はまばらで気候条件は平野に比べてきびしく、たえがたい。ゆたかな動物相がみられる土地である。

名前とその山岳としての様相

この西部にある山系は、ところどころで合流するいくつかの山脈からなっていて、その主要なものはカルダモウム山脈、すなわち Phnom Kravanh である。この山脈の名前は、カンボディア人が Kravanh と呼ぶカルダモウムに由来している。このカルダモウムは山腹の深い森林に自生する珍しい植物なのである。この名前をもった小灌木は 2 m ないし 5 m の高さである。この木は年にたった一つの花しか咲かせず、しかも奇妙なことには、その香りの強い白い花は地面とすれすれの位置、つまり木の下の方で咲くのである。その花はぶどうの房か、稲の穂によく似た形をしている。結実したときには、まったくとうもろこしの形とそっくりになる。カルダモウムの実は摘みとられてから少し乾燥される。人々はその薬効を説く。興奮剤、下熱剤となる。

Kravanh 山脈の地形はほとんど知られておらず、事実まったく複雑なのである。まるで山々がたがいに角突きあわせ、またはこんがらがっていると思えるほどの、つまり混沌の山々なのである。その全体としての地域は、だいたいの北西から南東に向いた一種の傾斜面のようである。

この傾斜面は(そういう面があるとして)、西から東へと傾いていて、いくつかの山頂がとび出している。こうした山々の間を、不規則な軌跡を描いて水路が走っている。数多くの河川の源は、この高地帯にある。そのあるものは北に流れ、大湖やメコン河に注いでいる。また他の、数にすればより多くの河川

は比較的近い海の方へと流れ下る。ほとんどのけわしい山腹をめぐるものは大きな森林である。山頂の方は反対に水流によってしばしば裸地のようになっている。登山道はめったになく、あるといえば流れが頻繁にかわる川や溪流の川床だけである。全体についていえることは、地形が複雑で入りにくいところである。道路はない。細い踏み分け道だけが、それはたいてい周囲の木々で覆われて、もっとも景色は悪くないのだが、大胆にも森の奥まで入りこんでいる。この道も直線的に高さに力強く挑むといったものではさらになく、健脚をもった山の民や、しっかりした足どりの象だけが危険をおかして登っていきけるように山腹を這って続いている。その道程は記憶にたどれないほど以前から知られていた。この道のあちこちには、時として石積みが見られるが、これは森の精霊への供物なのである。この道を通る人だれもかれもが、そこに森の精霊への気持をこめて石を置いていくのである。

住 民

このように無愛想のところであるために、人はほとんど住んでいない。かつて Pol という名で呼ばれた住民はいくつかの部族からなっている。第一は Paor で、彼らの言葉はことにアンナン山脈に住む部族が使うある言語と類似している。その次に来るのは、その代表的なものが古クメール族と呼ばれるいくつかの部族である。その中の例えば Thpong は最も永い間その部族の個性をもち続け、ある地方では彼らの部族名が地名として使われている。最後は近代に入ってからカンボディアの歴史が遂行した侵入の際、捕われの身となった主としてラオス人からなる捕囚の子孫たちである。

彼ら住民は他の内国人と同じように人頭税を払っていたが、その上王国の民に課せられたよりも一層重い賦役に従わねばならなかった。その内容は彼らの以前住んでいた土地で何を作っていたかによって様々であった。Pol 族はそして彼らの食糧となるいくらかの米を受けた。彼らはカンボディアでは、一般市民からは独立した存在である。

Paor たちは宗教というものをもたない。あるのはあいまいな森の精霊や山の神への崇拜だけで、この不明確な神性は一樣に Neakta と呼ばれている。宗教的な禁忌もまた数多い。

Paor 以外の住民はしかし主として仏教徒であるが、彼らもまた Paor のある種の信仰と同じようなものを持っている。彼らはこの山脈の南斜面に住んでいる。ある土地にはその土地に特有の信仰がある。近年になってこうした忘れられた民も行政の関与するところとなり、交通路の改善、医療チームの巡回、救援物資や種子の補給、海賊の追放といった仕事が行なわれている。

ゆたかな自然

森林のゆたかさは相当のものであるが、進入道路がないためにほとんど開発されていない。カンボディアに育つ樹種のすべてを、それもふんだんにここではみることができる。材木となり、樹脂を出し、家具に造れるといった木がたくさんにある。しかし山火事が起きるとその損害は大きい。地下資源はほとんど採掘されていない。銀鉱石、硝石、石灰岩の鉱脈があるだろうと思われる。この山脈の東端にある大理石の山のことについてふれておこう。この山には柔かい一種の大理石、バゴダ石の石切り場がいくつかある。この石は空気にさらしておくと硬くなる性質をもち、ブルサットの工人たちはクメール文化の伝統的な風味をもったなかなかいい細工をする。高地帯からはカルダモウムのほかに、かなり重要な輸出品も供給される。樹脂（いくつかの種類がある）、しおろ、獣皮、弾力性のある獣角、松明、ラタニアの繊維で作った敷物や袋、漁業に用いられる竹などである。森はまた象の群（象牙をもったものは僅かだ）に、あらゆる種類の鹿に、かくれ場所を提供する。虎や豹も数多い。野牛やガウル（Khting という）、いうまでもないが猪、小型の狩猟獣もみられる。河川にはワニが多い。

いくつかの地域はハンターのよき猟場ともなりうるであろう。

風光

仕事への隷属や近代的な生活からの逃避を好む者にとって、この野性味ある山岳地方を横切る小旅行の楽しみ、その美しさは比べるものがないほどである。象やときには馬に乗って、天蓋のように覆いかぶさる木々の下を、底知れず深い密林を進む。あるときは雄大な、あるときはなんとも魅惑的な光景がひろがる。山頂はまだ侵されたこともないようだ。そこで踏みつけるものは、びっく

りするほど大きな、香りの強い、えもいわれぬ色彩をもった蘭である。さえぎる物のない地平線。時間もここにはもはや存在しない。夜になるとキャンプが火のまわりに並ぶ。焰の赤い色を帯びた光が、その空地のまわりに立つ木々が暗闇中に映える。星空の下での、肌をさす山の空気にあふれた森の夜は忘れられない思い出となって残る。

「カンボディア事情」
カンボディア観光局

モンスーンのメカニズム

いま東アジアの全域が大洋に覆われてい、気候差は単に緯度にも依っているとす。赤道には低圧部があるので雨が多く、気温は年に2回3月と9月とに最も高くなる。赤道の両側からはこの低気圧にひきつけられて、熱帯高圧部からの風が吹く（貿易風）。

この配置は、大陸の存在によって乱される。冬、大陸は周囲の海より一層冷たくなり、気圧も海上におけるより高くなる。そこは高気圧地帯となり、より高い層から空気が下がってきてやがて四方へ発散するその中心から周囲へと気圧を下げながら、高圧部から風が吹き出す。この吹き出す風は、時計の針のまわる方向にぐるぐる回りながら吹く。この風はその起源からして冷たく乾燥している。反対に夏の間は大洋より気温の高い大地は低気圧域となる。大地は海からの風をひきよせる。この湿気を含んだ空気は色々な機会に冷えながら凝縮される。それは気圧の低いところの内部へとその空気が上昇して行った場合、山に近づいてきた場合、冷氣団とぶつかった場合などである。

こうしてその緯度がどうであれ、熱帯地方におけると同様のシステムに、乾燥した冬と湿気の高い夏の対照をみせながら落着くという傾向がみられる。このシステムを決定するのは、見かけの太陽の運動だけではなく、冬の大陸風と夏の海風の交替でもある。この季節風がすなわち、アラビア語の「季節」（mausim）に由来するモンスーンなのである。アジアが最大の大陸であり、しかも大気の運動の中心が大洋よりそれほど遠くないがために、この地域ほどモンスーンが定期的に吹き、緯度的に広く拡がってみられるところは世界中どこ

にもない。

冬

この期間、地球上もっとも強く大きな拵がりをもつアジアの高気圧はバイカル湖あたりにその中心をもつ（1月の平均気圧777mm）。2番目に大きな中心はバンジャブ地方に（765mm）ある。一方低気圧の中心は北太平洋から千島を覆う。2番目の中心はより広くインド洋とオーストラリアを包含する。

この気圧配置はすなわち東および南アジア全域を、大陸風もしくは冬の季節風の圏内におさめてしまうものである。それは9月の終り頃から次第にその形を決め、しばしば突然の嵐が前ぶれをする。この気圧配置がもたらすアジアの東側正面への風は比較的一定しており、しばしばずいぶん強い。これは気圧の最も高いところと低いところの距離が短いことによる。この期間、航海は時として難しくまた帆走は無理である。

大陸性の吹きおろす風を伴った高気圧が勢力をもつ時は同様に寡雨もしくは所によっては晴天続きが支配する時でもある。それはほとんど大部分の地点における定型である。すなわち冬の間、雨は最も少なくなる。

夏

春になって気温が高くなるにつれて、大陸は海からの空気をひき寄せ、4月、上海でヘノイで、風は南東いっばいに吹いている。その風は湿った空気をひきずり込む。ところで夏のモンスーンが、その特徴的なスコールを伴ってそれらしくなるのは5月か6月になってからのことである。風向の不規則な微風が吹く暑い日が何日か続いた後、しばしば嵐のように激しいにわか雨を伴う突風でそれは始まる。それから夏の大雨がやって来る。モンスーンはむしろ南の方に始まり、そこでかなり長い間続く。

インドでは天候の変り方があまりに突然で激しいので、英語で「モンスーンが破烈する」といった字句も当を得ているといえよう。乾燥しきったこの地域に、雨はあたかも堰を切った川のような激しきで降り始めるのである。

はたして6月の気圧配置を見てみよう。それは1月のほとんど反対になっている。高気圧の中心は太平洋上に見出される。もう一つの中心はインド洋とオ

ーオーストラリアの上に停滞している。再び気温が高くなったアジア大陸はそのほぼ全域が757mmの等圧線の中におさまっている。大陸はかくてその低圧部の周囲をめぐる大洋の風に呼びかける。インド洋には南西の風が、上海より高緯度地方には南および南東の風が吹きわたる。

ーたんはじまると、夏のモンスーンは至る所ではげしいにわか雨を伴って大雨をひきおこす。雨量はこの期間中に、一年でも最も多くなる。

Jules Sion

「モンスーンアジア」

サンボールダム

河口からサンボール (Sambor) までのメコン河は、雨季で最も浅い所が6m、乾季では2mとなって航行可能とみなされる。水運についての難問は、大河の河口から565Kmの位置にあって、コーンの滝のすぐ下のVoeunkhanに至る166Kmにわたるサンボールの急流からである。この区間、河床には露岩が点在しそれは水面が最も低くなる時には水中から突き出て来、そのため乾季の航行は危険もしくは不可能になるのである。この難問に対処するためには急流の最下流域にダムを造り、これによって水面を高くし、通常航行可能区間をカンボディアとラオス国境地点までのばすということが考えられる。このダムは同時に多量のエネルギーを供給しうるし、またカンボディアの将来の消費市場に非常に近いという利点もありえよう。水はその流れを変えさせれば、クラチエの下流に広がる肥沃な平野に灌漑することも可能である。

急流はクラチエの上流15Km、河床に突き出した砂岩質の岩に臨むサンボールにはじまる。最低水準の平均値は海拔7m、増水時は17m、河岸は24mである。あまり高くないダムを築いても水位は乾季で30mになるであろう。逆流する水は急流の全域を浸し、コーンの滝直下のVoeunkhanにまで達する。クラチエの上流128Kmの地点に海拔35mのストウントレンの町がある。高水位の時の水面からは1m高いだけである。サンボールのダムができ上がった後、増水した場合にストウントレンが水浸しになることはほぼ間違いない。これを避けるためにはサンボールまで水位を24mに限って上げるとすれば水はスト

ウントレンの上流 29 Km あたりまで達してとまる。この地点にもう一つのダムを築いて水を集め 40 m の高さにまであげる。しかしながらこの組合わせの原価を比較してみて、サンポールに造るダムにより 30 m の水位を保つということを骨子とした提案を支持する方がむしろ適当であろうということが認められた。この場合ストウントレンの町は低い土手で守られるか、もしくはもう少し高い土地へ移すことを余儀なくさせられよう。

ざっと見て 30 マイナス 7 で 23 m の増、現在の流量が毎秒 1,405 立方 m、うち毎秒 100 立方 m を灌漑用に流すとしてこの構築によって 214 億 kWh 時のエネルギーが確保されることになる。これは 24 万 5 千 kW の電力に相当する。同様にこの工事は容易にクラチエ以下のメコン両岸に沿った、非常に肥沃な帯状地に灌漑用水を供給しうるので今後はあらゆる種類の商品作物の栽培が可能となる。その場合にはこの河の両岸および自然堤防の裏に沿ってある凹地の向う側の高地帯の裾にも、水路を造ることが必要になってこよう。灌漑面積は全部で 10 万ないし 20 万ヘクタールと推定される。

このダムはクラチエの上流 15 Km のサンポールのあたりに造られることになろう。その上流には毎秒 6 万立方 m に達する大水を排出するべく可動水門が備えられよう。水位差が 23 m にもなるところでは水門が置かれねばならない。ダムの上流には貯水地の水が溢れ出るのをさえぎるように、あまり高くない堤防が両岸沿いに必要になるだろう。

メコン流域開発 ECAFE の調査

ケップ海水浴場

ケップの海岸には、タイ湾の沖の Kas Rong でみられるような、ポリネシア的なまぶしさの白砂もなく、南海のさんご礁にたわむれる透明な波もない。湾の波は時に灰色の、または黒い大理石模様になる赤褐色の砂を打寄せるのみである。特に南西モンスーンが吹きまくると、水はまったく茶色に濁ってしまう。ココヤシ林が海岸をとりまいているが、あるいはその高さを除いて、タヒチにあるものと異っているだろうか。やしの木の長い幹が光沢のあるやしの実の束

をつけて、波のかなたにゆれるのは、ここもタヒチも同じである。その後方にはびんろうやしの木が高くそびえ、その細い幹の上にやせた葉の前立をつけている。こんな所では、私たちは何の気なしに、カンボディアの俚諺にいう幸運のしるし、つまり同じ視野の中に直立したココヤシとねじれたびんろうやしを収めることをやってみたいと思ってそれを探している自分にはっと気がついたりするものだ。この幹の間にはきょうちくとう、ブーゲンビリア、ハイビスカス、アラマンダスの花が、この緑のシンフォニーの中で鮮かな赤、紫、黄色と、それぞれの美をきそっている。

ポリネシアの海岸と異って、ここケップの海岸は未だ犯されない自然の野性的な魅惑というものが無い。きわめてはっきりしたセンスで整備されているが、またこの海岸には実に美しい芝生があるが、その美しい秩序の中に、なにか幻想的なものを欠いているようだ。しかし変化に富むこの風光は、ここを心地よい小世界としており、そこには目を楽しませるものすべてが結集されている。ここでは海に垂直に沈む岩石の衝角があつて、その上には永遠の激浪が打ってくる。あちらではやしの実に縁取られた砂だらけのホラ貝があり、さらに遠くには荒海がその土台にとびかかる張出しの家があるし、また森が海に迫り波はその打寄せる潮ごとに、石の間に這う孤立した木々の根の入り組んだ様子を露出する。奇岩怪石、水に浸された森林、ラテライト性の砂浜、砂の海岸がほとんど数キロにわたって続いている。

ケップの海はほとんど微笑んでいる。それは早朝、太陽がまだ山のむこうに隠れている時、生まれ出る曙によって淡いばら色に染まった雲か、大空の純粋な瑠璃色を反映する、ひづみない一つの無限そのものである。

最初の光線が大地を再びあたためるや否や、そよ風は起り、水面にはかすかな震えが走り、泡で縁取られた小波が太陽にあたって虹色に光る。朝の中間色について緑と青の色合いがあり、日が暮れると海は夕空の紫色の雲を映す。黄昏になると、時には淡い緑色に染まるまだ明るい大空の上に、フーコック(Phu Quoc)島の切り立った山並みの緑が、水平線の奥を青いとばりで隠して行く。この澄んだ空気の中では、このように輝やく光の下で、空は永遠の魅惑である。ある時は、それは一点のけがれもない青天井ともなり、ほとんど塗られていない乳白色の暮ともなり、またある時は暴風雨を告げにきた暗雲で覆われた、変

化する色彩の層雲の、その細やかな光でかくされたりする。ここでは雨もまた魅力のないものではない。決して人を困らせず、苦痛を与えない、温かく芳香をもった大粒の雨は色彩をよみがえらせ鬱鬱気をやわらげ、生きとし生けるものに新しい生気を与える。午後のおか雨の後、山にはなお雲の頭巾がかかり、そして太陽が水平線に沈む時、終幕が訪れる。血の色の円盤がフーコック島の影にかくれると同時に、空は燃え、夕方になると雲はだんだんと白色からばら色に、それから赤にと色を変える。長い間の緑色と青色から、時には知らない間に淡い紫と藍色にいきまじって変色し、それから淡灰色にあせて、やがて夜は岸を洗うこの半暗黒を導く。

ケップはこのように、真に空と海と森がそれぞれお伽話の国の役割を演ずる神秘的な三幅対の絵なのである。

Robert Vannel

グラフィ誌「インドシナ」

象

象はカンボディアの森林の巨人である。現代的に調和のとれた輪郭になれてしまった私たちの目には驚異と映るほどの余裕たっぷりにできた胴体、短い首にこれも大きな頭部、扇のような2つの耳、小さな眼、長くのびてチューブのような鼻、そして顎のような尾。この物々しい外見だけで、誰がいったい象は動物の中でも最も器用で賢いものと認識することができようか。というのも実は、この動物はすぐれた本能と機敏な動作の持主だからである。休息しているとき、象はその巨体の重みで大地にめり込んでいるかにみえても、その動いているときにはメカニズムが速やかに作動しており、たとえばその歩みは馬のギャロップと同じスピードをもつ。象は自由に直線的行動をとるが、あの身体つきが斜めに動く妨げとなるし、後退する場合も必ず頭を回転してからである。

感覚という点では象は驚ろくほど恵まれている。とくに鼻はその最たる傑作であって、運動をする一肢体でありまた感覚器官である。つまり象はその鼻を高く上げて、どんな場所に居てもそこにたまたよう香りをかぎわける。欲しいも

のに近づくとときにはその鼻を伸ばし、また縮めて、人間の腕よりもうまく物をその末端でつかみ、吸い上げる。一たん密林に入ったり突進したりするときの象は、その鼻を傷つけないようらせん状に巻き込んでしまう。たとえばのかな臭気であっても遠くからかき出すことができ、休息のときも警戒しているときも、いつも動いている巨大な耳はどんな小さな音もききとりうる。もつとも眼はあまりに小さいということのほか、広い頭骨の隆起によって分離しているがために、象にはあまり役立ってはいないかのようである。

食物や衛生にも注意を払う象は常に清潔を好み、他の動物によって汚されなことを望んでいるようである。葉の良し悪しを正確に区別し、虫や砂、泥をよくおとすために、象は汚れた葉を振りながら食べる。象はまたデリケートな味覚をもち、季節になると香りを放つ柔かい植物をとり入れて献立を作ったりして変化させることを知っている。またしばしば水に浸って沐浴し、鼻のシャワーを浴びて衛生には注意している。象の皮膚は、部位によりタコになってないところはたいへんに鋭敏である。蠅や蚊に刺されたりすることは象には敏感にうけとられる。虫に刺されないようにその知能をフルに働かせ、尾を振ったり鼻や耳を動かして虫を打ち、皮膚を動かし小枝をとって虫を追ったりする。また後肢を互にこすり、時には水やほこりを吸って背中に吹きつけたりもする。象は純草食で、その食物は木の根、草、葉、柔かい木、果実や穀物である。

Charles Dumas

「カンボディアの野性動物」

外インド

ここに外インドと呼ばれる地理的部分はインドネシアとインドシナを含むが、インドの影響を受けずに発展した国である北ベトナムはこれを除いている。

このように定義されるこの外インドの自然のゆたかさや地理的環境がこの地域を最も重要なものとした。紀元後1世紀の初め頃に、インド人航海者が帆走して来る「黄金の土地」となってからのインドシナやとくにインドネシアは、その数世紀後にはアラブ人やヨーロッパ人にとって、近年世界でも最大のゴム、錫、石油の供給地となるまでは、香料の、樟腦のまた香木の国として知られる

に至ったのである。一方半島やスンダ列島は、事実西洋からインドから中国への往還に航海者たちが必ず寄港しなければならない所となり、海上貿易の重要地点となった。

文化の面からみた外インドは多かれ少なかれ往時そこに影響を及ぼしたインド文化の深い痕跡によって特徴づけられている。すなわちその国で話されることばの語いにおけるサンスクリットの重要性、またインド起源の文字が今もなお書かれていること、インドの法律や行政組織の影響、イスラム教やシンハー一仏教に改宗した国々において僅かながらパラモンの伝統が残存していること、古い建造物の建築法や彫刻がインド芸術に結びつきをもち、またサンスクリットで書かれた銘記もあることなどである。

インド文明の拡大は世界史の大きい挿話の一つであり、人類の相当な部分の運命を決定したものである。大まかな観察から得られるこうした事実によって、私たちはインド文明のもたらすものの全き重要性を推察することができる。肉体的体質的な特徴のみとってみれば、カンボディアの農民はブノンやサムレといった山岳民族となんら変るところはない。しかしブノン族は中部ベトナムに住むモイ族と同じく部族を単位とする社会単位の段階にとどまり、紛争の解決にあたっては口伝の慣習によっている。宗教にしても部族ごとに異った要素をもった素朴な汎神論しかもっていない。彼らの宇宙観も同じく原始的である。また書きことばももっていない。ところで最も文明から遠くにあるカンボディア人でも、彼ら山岳民族とは異って、高度な階級制機構に織り込まれており、明文化された法典に基づく裁判所による判決を受けることができる。このカンボディア人はまた、教義、経典、聖職者をもつ宗教、アジアの人類の大部分と同じく、世界の体系と同時に死後の世界について首尾一貫した宗教をきわめて熱心に信奉している。また彼は広く文芸へと近づくべく、また遠く離れた同胞と意思を疎通しうる文字体系ももちあわせている。

こうしたことすべてを彼はインドに負うているのである。この事実をいささか雑な言い方で要約すれば、彼はインド化されたブノンであるともいえる。

まずは正直正銘のインド人国家であった一連の王国はこのインド化から生まれ、その後その文化的発現の中で、各国とも共通の源に負うている家族的雰囲気を保つつも、その地の文化的基盤を反映し、個有の精神によってそれぞれ進

化をしてきたのであった。

Georges Coedes

「インド化された国々の古代史」

クメール

カンボディアに来た旅行者がはっとする一つの事実がある。それはこの国の住民が、この地で出くわす他のアジア人、つまりベトナム人や中国人とずいぶんタイプが異うということである。そのうえ町でもまた地方でも、彼が日ごとに近づくこの民族は彼自身とまったく同じようであり、それはまたアンコールワットやアンコールトムの浮彫りに、それがいつの時代に属するものであれクメール文化の影像に、同じタイプを見出しうるのである。

小さくてほっそりした、著しくアジア的なタイプの南中国人やベトナム人と並ぶと、カンボディア人は比較的背が高くすらりとしており、体つきはしなやかな筋肉質で、それにしても多少短い脚とがっしりした関節を備えている。頭の形はといえば丸形で形がよく、はっきりした顔立ちで、老人にあつては木彫の像のように彫りが深い。額は高く反りかげんで、鼻はつぶれたように小さい中国人のそれとはずいぶん異って大きく張っている。唇は平たく肉づきがよく官能的で、顎は角ばって見える。肌の色はかなり濃く、髪は黒くてしばしばカールしており、ときにはネグリート起源を物語るように縮れている。

まだ若いときの彼女らは可愛らしく、すらりとしてしなやかな体つきである。アーモンドの実の形に大きく開かれた目はほれぼれするほどで、視線はあたたく優しさに満ちてい、首はほっそりと長めで、肩はまるくなだらかである。胸は形よく豊満で、物腰も上品である。さっぱりと短かく刈った髪は彼女らをボーイッシュに見せ、また魅力的である。しかし農業労働と多産は彼女らを早く老け込ませ、またやせさせる。とはいえ彼女たちはやはりしなやかで、仏への信心を忘れはしない。彼女らは慰めにキンマの実の小片をいつも噛むために、年を取ると口の形が悪くなり、その色も血のように赤くなってしまう。

しかし老いも若きも、男も女も、バイヨン (Bayon) の仏たちの顔をあやしくも魅力的にしているあの微笑、今日のカンボディア人の顔に見出すその微笑

で明るい。それはまた最もいやらしい表情をすら美しいものに仕立てているのである。

カンボディア人は陽気である。彼らには微笑みを含んだ呑気なところがある。ひたむきでつましやかで、欲望も質素である彼らは最小限の労働で満足している。もつとも彼らが呑気だ、無気力だと大げさに言う必要もないし、かけ足でこの国を横切って満足している旅行者のように、カンボディア人というのは安易の自然の中で生をつないでいだけでいいんだといった考えをもつ必要もなからう。というのも、とくにやし砂糖の収穫といった仕事は、とりわけこうした人を衰弱させる、暑く湿度が高く、しばしば荒れる気候条件のもとでは決して見過ごせない、絶えざる努力が要求されるからである。こういった条件ではせつせと働くこともできず、その気力さえ失わせるものである。同時にカンボディアに深くしみ込んでいる仏の教えはこうした活動を刺激するといった性格のものでなく、むしろ逆であることにも注目してみればよいだろう。

カンボディア人は正直で、利口で、手先もたいへん器用である。生来の機知に恵まれた彼らは諧謔や皮肉も否定しないセンスをもち、ときには彼らが最高の敬意を払ってはばからない僧侶たちにもそれをやってみて喜んでいる。もつともこうした悪口をいったりする気風があるとはいえ、僧侶らの階級に対する崇拜の気持にはかわりがない。同じようにクメール人たちが隣国のチャムやジャムに血なまぐさい圧倒的な戦いを挑み、それらを征服した民族であることも忘れてはならない。彼らはまた異例の建築者たちでもあった。こういったことから明らかにされるのは、生活条件がより容易になりその結果戦斗能力や創造力の大きな部分がたぶん取去られてしまっている今日のカンボディア人と精神的な類似をあまり追い求めようとするのは、大した意味をもたないのだということであろう。

Andre Migot

「クメール」

カンブチア・クロム

カンブチア・クロム。南のカンボディア。このたった2つの文字が同胞の1

人1人の心に重々しくひびく。ためらうことを知らぬ隣人によって侵されたわが地。しかも彼らの祖先の土地に住みついた60万のクメール人がかつてと同じようにきびしい侵略者の法に今日まだしばられているとは。

南ベトナムに住む少数同胞の数は50万と推定されているが、何人かの著述家はその数60万に達すると考えている。事実人口統計はそのはげしい人口増加をはっきり示している。1888年に15万、1925年には30万になり、1937年には35万、1948年には48万とある。

カンボディア人は主として巴萨ック河の向う側にみられる。Traving 省 (Preah Trapeang) では1937年に8万2千人の稠密な集団があったことが明らかになっている。同じ年のベトナム人口は15万6千であった。Soctranq 省 (Srok Khleang) では同じくベトナム人10万7千に対して5万人の割合、もっともBaclieu (Po Leu) では $\frac{1}{6}$ 、Cantho では $\frac{1}{10}$ にしかすぎなかった。一方Rachgia (Kramuon Sar) では19万2千に対し6万5千と $\frac{1}{3}$ 人にのぼり、これはHatien (Peam) でもほぼ同じであった。Chaudoc (Meat Chrouk) では16万8千のベトナム人に対してカンボディア人4万と $\frac{1}{4}$ になっている。Travinh 省を除いて考えると Transbasac だけで少数同胞は人口の16%に達することになる (フランス遠東学院の 前院長 Malleret 氏による)。

南ベトナムのカンボディア人、すなわちクメール・クロムはこれまで、ベトナム人の圧迫にもかかわらず注目に値する人口を保ってきた。話される言葉はクメール語のままだし、宗教も hinayaniste である。伝統や習慣も、侵入者たちが絶望的な努力でそれらを捨て去りベトナムの習慣になおさせようという決意をすればするほど、保存の手がうたれてきた。

Louis Malleret 氏はまた書いている。「安南人の村落がやし、ココやし、細いびんろうやしの木々の間にかたまっているとき、独立心の強い、また自尊心に満ちたカンボディア人は田園の風景の中に散り散りになった住居を好む。前者は河川が氾濫する地方を除いては平屋の家を作り、後者はどちらかといえば高床の家を選ぶ。彼らの家は孤立して、茂った葉をもつ木々の間に、より健康的な、乾いた土と、おだやかな熱気と、安全な水のある土地に建てられるのだ。」

南ベトナムにあるカンボディア人の仏教寺院はカンボディアの寺院とまったくよく似ている。全体の造り、建て方、ただよう静寂、パットンバンヤブノンベンの寺院でみるのと同じものをそこに見出しうる。現在南ベトナムには、カンボディア人の寺院が約400ある。

王国に居るクメールとクメール・クロムのたった一つの相違はその姓にある。ベトナム人に強制されたものである。その他のものは除いてクメール・クロムは事実つぎのような姓を我慢してつけている。Son, Sam, Kim, Truong, Chau などである。

「今日のカンボディア」

(1958年2月)

植物文明

インドシナの民族は、いかなる民族であれ、つまり最も文明から遠いものも発展をとげたものも、ほとんど例外なく食糧に道具に、衣に住に、植物からなるものを使用している。この偏執は、けっして自然条件がなさしめた結果でなく文明の一表現様式なのである。

食糧についていえば、それは本質的に植物中心である。農民たちは何よりも米を、つぎにとうもろこしを、芋類を、タロ芋を、また野菜を食べている。彼らは牛乳や乳製品を知らず、肉はほんの少ししか消費せず、平均すると好きではあるが魚の消費もわずかである。畜産の進歩がほとんどみられないのは、インドシナ諸民族の物質生活の本質的な特色である。

道具も基本的には植物を材料としてつくられる。これらの民族の物質生活に果す金属の役割は、まことに目立たない。農機具は木と竹でつくられる。木のまぐわ、木の土砕き機、金属といえば小さな鋤べらの鋤鉄だけという鋤、水を運ぶために目をつめたかごの類……。竹は道具としても立派なものである。それは農機具、武器、かごやざる製作で最も多く使用される材料となっている。

衣類は植物からとれるものを織ってつくられる。主要な繊維としては棉がある。モイ族のあるものは彼らのもっと簡単な衣類用に最もシンプルでどこにもある繊維、木の皮をも使っている。ラタニアや水やしの葉は上手に編まれま

た縫われ笠やまったく水を通さない箕にもなる。履物はほとんど木でつくられる。頭の前から足の先まで、インドシナの住民は植物からとれるものを身につける。

住居になるとほとんど植物質だけでできている。家を建てるのに金属は不要である。今日に至るまで家屋は組み合わせた木の骨組の上につくられている。合掌の上に椽瓦をおくとか屋根瓦の代りに木の葉を葺くとか、その組み合わせができない場合には藤の紐が使用される。釘が世に出たのはつい最近の時代のこと、伝統的な家屋には1グラムといえ金属は使われていない。インドシナの民族の大部分が杭上の家屋を建ててきたが、これには荷重を小さくするためにもっぱら植物材が使用されねばならなかったのである。カンボディア人やラオス人、また他の民族の家屋はつまり木の杭、木の骨組、木の葉から shau という草の屋根、編んだ竹でつくった間仕切りや床からなるのである。ベトナム人だけは家屋を大地に、地べたに建て、家にもまた土を使っている。大地に建てられるとはいっても土台もなく、骨組みそのものは木造である。壁はすき間を埋める意味しかもないが、それも一様に編んだ竹か、竹のトラスで支えられた荒壁か砕けた土の……。

Pierre Gourou

〔インドシナの土地利用〕

ゴム樹栽培

ゴム樹の栽培は最近まで高くつく施設と組織、それによく訓練された人力を要求する大規模な栽培方式であると考えられてきた。1920年から25年にかけてゴムはその本格的な叙事詩をものし、最初のプランテーション創設者たちは深い森の中で困難と闘わねばならない、ほんとうの意味での英雄たちであったのだ。

今日のゴム樹栽培は研究所の業績があるおかげで新しいプランテーションの創立を左右する未知のことながらもその後ほとんどなくなった。かくして家庭へゴム樹栽培を導入することを目ざした調査もこれまでの業績に大きな恩恵をうけ、その近い将来の興味ある展望が開けてきた。

ゴム樹の家庭栽培促進は王国政府の目標の一つなのである。この計画は将来の小規模栽培家の技術的予行演習、協同組合の設立、財政援助などを想定したものである。ところでもしこの実験が成功したあかつきには、カンボディアの農村経済は大きくその姿をかえることになるろう。

家庭ゴム栽培の行政的、技術的監理は水資源・森林局に委せられている。

考えられている計画は家庭栽培が1万5千ヘクタールになることを予想し、8年後の生産を1万8千トンと見積っている。

切り払われた森林のあとの土地被覆、そして人に生気を与える林のたたずまいのほか、ゴムは、いうまでもなく、住民たちにかわることなく生産物を供給するであろう。

1ヘクタールのプランテーションで、樹が成熟年齢に達した場合はキロあたり18ないし20リエルのラテックスが1,000磅から1,200磅とれるから、収益は1万8千から2万リエルになる。

最初の4年間には、もしゴムの生産が求められない場合、ゴム樹と一緒に大豆や緑豆を作付することも可能である。正確にいえば、同じ1ヘクタールでも大豆や緑豆ならば1キロ5リエルとして5袋から6袋しかとれないから、収益も年間5ないし6千リエルにしかない。そのうえ価格は一定しておらず輸出できるという保証もない。

財政面からみても、ゴムは他の季節作物ほど植つけのときでも費用がかからない。最初の4年間、農民は大豆や緑豆畑の草取りをしながらゴム樹の管理ができる。5年目から6年目に入ると農民はもう他の食用作物はつくれないが、年4回の草取りをするだけでよくなる。最高で年間30日から40日の労働である。

社会的にみれば、ゴム樹栽培とその採取に1年を通じたコンスタントな人手を要求する。それに比べて大豆や緑豆の栽培は年間3ないし4カ月の労働力しか必要でない。

「今日のカンボディア」所載
の研究から

太湖の漁業

太湖はカンボディア漁業の中心である。魚獲（鮮魚で）は年間10万トンと推定される。この湖の面積が低水位期で2700平方Km、高水位のときで1万平方Kmであることを思うとたいへんな量である。太湖の魚類生産は世界に類のないほどの大きさである。事実、最大面積でみてもここでは1平方Kmあたり10トンであるのに、魚の密度が高いといわれる大西洋北部、北海でもその生産は1平方Kmあたり1トンでしかないのだから。

湖の異例の生産性は、その環境の特殊な条件と関連がある。たとえばこの湖は、おそらく古い海湾の底部である。海との自由な連絡も、しかしメコン河のデルタが次第に発達し、とだえた。湾の出口を埋めると、メコン河はそのデルタをさらに海に向かって発達させた。こうした湖の歴史は地理学的にのみ明らかであるのみならず、いくつかの事実、陸封型の海棲動物の存在、ブノンペン南部のある距離までは堀抜き井戸の水に塩分が含まれているといったことから証明される。

太湖の低水位期の最大水深は2mである。高水位期になると湖面の水位が15～16mに達する。すなわち最深部の水深は14mである。このとき、湖は周囲の平野にあふれる。

こうした特殊な条件が、魚の繁殖の原因の一面を説明する。すなわち水中に没した木の枝は、6月から魚の格好の産卵場所となる。他面この洪水林には各種の水藻がゆたかに育ち、それは湖水を茶色がかった動・植物の真の培養器とし、魚が口をあけるだけで食物が入ってくるという状態になる。

魚の成長もまた著るしく、ヨーロッパの海で育つ魚類の成長と同じ位のスピードである。太湖の魚の一種Kaekは2年経つと32cmになるが、モロッコ（北アフリカ）のMerlu（魚名）は同じ期間に28cm、フランスのガスコーニュ湾のそれは25cmというぐあいである。

しかしカンボディアでも太湖以外の淡水では、ヨーロッパの淡水におけるよりも劣った成長度を示している。すなわち太湖では2年で32cmになったKaekも、メコン河ではたった17cmにしか成長しない。

豊富な魚族はたくさんの漁民をひきつける。定着漁民は水辺に、高床の家も

しくは竹のいかだの上の家に住んでいる。こうした集落は、湖の周辺ならどこにでもみられる。乾季になると漁民が増える。漁業専従者数は推定3万人である。

この豊かさは、賢明に管理されねばならない。というも（魚が）無尽蔵であるかのように考えることはまちがいだからである。洪水林は湖の魚類の成長に最も重要な役割をになうものであるから、この林を大切に、過度の森林伐採を禁止しなければいけない。しばしば人が認めるように、こうした行為は湖の漁業を破壊に導くものだからである。すべての洪水林を保護林とし、型にはまった森林伐採を禁止することが、洪水林の保存を確かなものにするであろう。一方これだけの環境の好ましい条件を保ったとして、魚の資源が無尽蔵であることに疑問をもつ必要があるだろうか。魚の量が減ったようには思えない。しかしその魚が小さくなってきていることは、濫獲のあることを示しているのだ。

最後に、太湖の速い沈泥は結果において洪水面積を少なくし、ひいては魚の生産を少なくするのではないかという不安をいただく必要はないだろうか。すでにいくつかの憂慮すべき兆が報告されている。沈泥は年間1～2cmというスピードで進んでいるのだ。

Pierre Gourou

「インドシナの土地利用」

ノロドム・シハヌーク5カ年（1960～1964）計画

5カ年計画実施のために承認された総金額は80億リエルで、5カ年間の年次支出は下記のとおりである。

| | |
|-------|--------|
| 1960年 | 15億リエル |
| 1961年 | 14億リエル |
| 1962年 | 16億リエル |
| 1963年 | 17億リエル |
| 1964年 | 18億リエル |

1) 経 済

国民1人あたり年間3%（名目）の国内経済成長を期待し、5カ年計画終了時には総計16%の成長を遂げることを目的とする。

なお算定の基準は1959年度末のつぎの数値とする。

総 人 口……………5百万人

国民総生産……………146億8,900万リエル

（1人あたり2,940リエル）

人口増加率が毎年2%であること、また目標が当初国民総生産16%の成長を追求するので、1964年度末の成果はつぎのように算定される。すなわち

総 人 口……………540万人

国民総生産……………187億リエル

（1人あたり3,400リエル）

国民総生産増加量 40億リエル

この計画を遂行するためには、資本産出係数が3/1であるから総投資額として120億リエルが必要とされる。

国家財政と同時に外国援助の可能性を考慮すると80億リエルが両者により賄われる投資額となり、残る40億リエルが民間の投資に期待される。

優先第1順位は国内生産におかれ、その資金額32億リエルで全体の40%である。

第二順位は生産増強や貿易振興に欠くべからざる基盤整備事業で、計画の5カ年で22億4千万リエル、全体の28%となる。

社会施設に対し、計画は19億6千万リエル、全体の24.50%しか認めていないが、これはすでにこの分野において相当の成果が得られておることから、この計画における努力はそれらを完成させ、また強化させることにむけられるためである。

最後に行政施設部門はきわめて低くおさえられ6億リエル、計画の5カ年で全体の7.50%となっている。

2) 財 政

総所要資金80億リエルには国家財政投資の55億リエルと、外国援助による投資25億リエルが含まれる。

この計画に対する資金の国家予算分については、毎年財政法にもとづき予算審議の際に決定される。外国援助については、各年度または何年かの期間に対して決められるが、これはすべて政府と外国との個別的協議による。

これら予算額の5カ年に対する割当てはつぎのとおり。(単位 百万リエル)

| | 国家予算 | 外国援助 |
|------|---------|-------|
| 1960 | 850 | 650 |
| 1961 | 850 | 850 |
| 1962 | 1,100 | 500 |
| 1963 | 1,250 | 450 |
| 1964 | 1,450 | 350 |
| | 計 5,500 | 2,800 |

国家財政における計画の資金運用と外国援助のそれとは逆方向に変化することがわかる。国家財政における支出は年を追って前向きに増えるのに、外国援助のそれは逆に減って行く。

一方この計画に要する資金のうち外国為替の必要額が50%と見込まれる。すなわち約40億リエルである。

第一次5カ年計画が、その他の東南アジア諸国により公表されたもの(1カ年1人あたり5%増)に比べて、とくに人民中国により追求されたそれ(プラス8%)に比べてひかえ目に計画されていることが指摘されよう。

これらの推計は全般的な傾向にもとづき、カンボディアのここ数年来の総生産の伸びを見て行なわれている。総生産は1938年には80億1,700万であったものが、1955年には115億1,600万リエルと435%増になっていたが、1959年にはこれが146億8,900万リエルとなり、1955年に比べ27.6%増となっている。

カンボディア国立銀行月報
(1960年12月号)

シヘヌークビル港

沿 革

今世紀の初め（1908年）以来、カンボディアでは海港を創設するための調査が続けられてきた。そうしてコンボンソム湾内地点が予定されたのであったが、この場所に通ずる道路がないためにこの案は一時見捨てられた形になっていた。

1925年にカンボット— Ream 間の道路が開かれて、一連の島によって守られた Ream 湾に最初の港湾施設の建設が行なわれることとなった。しかし、1937年、1942年、1948年に更にこの港湾施設の拡充あるいは新港開設計画が検討されたが、戦争やカンボット— Ream 間の道路の基礎工事が破壊されたことがその実現を阻むことになった。

インドシナ共通の経済システムが崩壊した後、王国にとって海に至る道を開くことは必要この上ないこととなった。

ひとりブノンペン港のみが外国との直接取引の場であった。さてこの河港は、乾季になると吃水の浅い船舶しか使用できなくなり、またメコン河の河口をもつ南ベトナム国内を自由に通過することができなくなれば、すなわち使用もかなわなくなる。

1954年の初めになって、王国政府は大型船舶も接岸可能な海港を建設するという決定を行なった。

地点の選択

大がかりな予備調査を行って後、選択はただちに約10mの水深が得られる2地点に限られることになった。すなわち1つはKas Pos（Pos島）に近いコンボンソム湾東南部地点、1つは同湾の南西部地点であった。

水深の十分でない（6m台）Ream湾、ならびに言うまでもないが海岸が平坦で沖積土からなるReam-Hatienに近い、国境に至る地域は計画からはずされねばならなかった。

進入がむづかしいという理由で同じくタイとの国境に向かう西海岸地区も、可能性のある地点を探すことを断念した。同様の理由によりコンボンソム湾南西部地点も見捨てられた。

残るはついにKas Pos地区のみとなった。1955年5月、この地域の航空写真により、密林が海岸に迫った処女地が問題になった。当初はこの森林のためにアプローチが難かしいであろうが、それでも計画された港湾施設を建設するのは最も適当な地点であることがはっきりした。

Kas Posと陸地間の水道を通れば、船舶の接岸も可能である。こうしてつぎのような船舶が自由に入れるようにと具体案がつけられた。

- 長さ162m、吃水7.87m、6,390重量トンの商船「カンボーシュ」。
- 長さ162m、吃水9.19m、1万4百重量トンのT₂級オイルタンカー。
- 長さ135m、吃水8.45m、1万3百重量トンの「リバティー号」級の貨物船。

最後に海岸線の地形からみて、将来港湾施設の拡張が必要になった場合も、その実行が容易であることもつけ加えておく。

建設工事のあらまし

主要工事はまず長さ290m、巾28mの棧橋の建設がある。この棧橋は両側とも使用できるようにすれば、少なくとも1万重量トン級の船舶4隻に停泊位置を提供しうる（4千トン級の沿岸貿易の貨物船ならば6隻は可能）。接岸の位置は、水深10mの地点に合致する。

棧橋には、石で固められたそれ自体も埠頭になる、長さ185m、巾10mの通路が設けられる。この埠頭と海岸線の間では大きな埋立て工事が行なわれる結果、4万平方mの平地が生まれる。この埋立て地と埠頭と第二防波堤とで囲まれたところは副港として港湾業務用船のたまり場としても、また必要とあれば吃水4ないし4.5mの小船舶の貨物積み下ろしにも利用されうる。

シハヌークビル港開港時に
作られたバンフレットより
(1960年4月)

われわれの立場

われわれの団結の結果、国内の平和はゆるぎないものとなった。そしてこの平和があつてこそ、われらの国を低開発国の状態から脱皮させようと熱心に働

き続けてきたサンクム (Sangkum, 社会主義人民同盟) はその事業の実行の、とくに 1950 年から 60 年以降の歩調をたえず高めることができたのであった。

われわれの多くの海外の友人たちはしかし時として、強国である友邦の気前のいい援助によって成し遂げられた目ざましい成就をのみ特筆することに熱心なようである。私はわれわれ自身によって、わが人民の努力と自発的な労働によってわれわれが築きあげてきたものにも海外の友人たちが目をむけてはくれないかと思うのだ。町や村を結ぶ道、水路、ダム、貯水池、学校、診療所。まるできのこのように、毎月できてくる。私はその披露の式典に出るために旅行ばかりしていなければならないくらいだ。見た目には地味でも中身は多様だし実用的な性格をもち、現実的すぎるくらいだからこそ、この仕事は大事なのだということである。一国民の誠実さ、勇気と力強さを表わす仕事だといえよう。

同志諸君、われわれはここ数年の間にさまざまな分野で多くの前進を成し遂げてきた。この勢いはこれからも止むことはない。教育の分野ではわれわれは技術教育と高等教育の拡充に今日努力している。それもソ連邦、アメリカ合衆国それに最近ではドイツや国際連合の友人たちが約束してくれている技術学校や大規模の専門学校といった手段だけでなく、われわれはサンクムの尽力、国家財政の犠牲的精神のお蔭で、すでにご存知と思うが、ブノンペンに大リセーを建てることにしている。また医科大学と法科大学のほか、われらの首都にふさわしく、文科大学、理科大学、行政学校がつけ加わることになるだろう。

施設の計画については、ブノンペン——シハヌークビル間の鉄道は現在建設の最中であり、これは第 1 次 5 年計画の終りにはできあがるだろう。第 2 次 5 年計画では第 2 鉄道の建設に着手されるはずである。この鉄道はバタンバン、コンボンチャム、クラチエとラオスを結ぶことになろう。われらの兵士たちの手によって開かれた立派な道路がわが国の西部全域をバイリンからシハヌークビルまで結ぶであろうこと、また他の道路がクメールーたちの土地につながるであろうことを憶えておいてほしい。

工業計画については、われらの友邦である中国の寛容によるいくつかの工場のほか、砂糖工場、ジュート工場、トラクター、タイヤの工場が建てられよ

うとしている。

われらのバイオエアーの、それも筆頭である FARK (王国陸軍) の活動によって コッコンおよびラッタナキリの新しい 2 州の開発がはじまった。かつて放置されていたこれらの地域はその装備を整え、少しずつ近代的になりつつある。Koh Por での演説で、私はわれわれの計画がどんなものであり、この 2 州に期待するものは何か、また農民たちの家族用住居の設置にずいぶんと努力をしたことを話したものだ。

近年中と予測されている Kamchay やメコンのダム工事による地方の電化および灌漑計画、その半分はすでにできあがったが地方の診療所や医療センターの増設計画のことも挙げておこう。

しかしながら、われわれには限度がありまた弱点のあることをわれわれは知っている。生産面でみると、とくに農業生産については、われわれの前進はその収量からいっても開拓された土地の面積でも、あるべき目標のとおりではない。地方の若者たちは、私がくり返して警告してきたにもかかわらず、あまりに頻繁に、学校を出るとすぐに生まれた村をすてて町へ飛び出してはいないか。つまらない行政職員のポストを求め、より金になる私企業の仕事はさげすみ、わがままな失業状態のうちに失敗し、生きていくだけの最下層の職業に従事するという青年たち。同志諸君、このわれらの国家にとって大きな危険である村からの脱出と、君たちの受持ち区域の中で勢力的に闘うために、私に力をかしてはくれないか。

とにかく色々な事態を考えてみたらうえて、この人の少ない貧しい、そしてとりあげるべき資源とってない（われわれの国では石油もダイヤモンドもウラニウムも見つかっていないのだ）国が、人民のために実に多くのことをすることに成功したという数少ない例を、われわれは提供しようと私は思う。われわれより大きくよりよい条件をそなえた国々のうちで、こうした成功を勝ち取れなかった国がいくつあるというのか。

われわれは進歩、安泰、国際的威信といった結果を得た。この結果をわが国にもたらしたのとはなんであっただろうか。それは一に国内のしっかりした組織、たとえばサンクムに支えられた団結の動き、そしてどのブロックからも是非なく同じ距離をおいた確たる中立の政治、それでしかなかったとわれわれは

断言することができるだろう。

ノロドム・シハヌーク殿下
「1961年4月の国民議
会におけるメッセージ」

参考文献について

以上に訳出した参考文献の主要なものほとんどがインドシナ研究者、すなわちフランス植民地としてのインドシナを研究したフランスの学者たちの論文の抜萃である。それ以後、とくに大戦後はこの地域の研究が遅れており現在入手可能な文献も多くないが、日本・カンボディア協会の機関誌にとりあげられたものを中心に、一般事情を知るのに役立つであろういくつかを読者の参考のために下に記しておく。

外務省アジア局 「カンボディア王国便覧」 日本国際問題研究所 東京
E. H. G. ドビエ (小堀巖訳) 「東南アジア」 古今書院 東京
梅棹忠夫 「東南アジア紀行」 中央公論社 東京
坂本徳松 「東南アジア」 社会思想社(現代教養文庫) 東京
丸山静男 「激動するインドシナ」 朝日新聞社 東京
深作光貞 「写真・アンコールワット」 角川文庫 東京
鈴木治夫・大石敏雄 「カンボディア訓練旅行」 朝日新聞社 東京

このほか外務省、経済企画庁、海外技術協力事業団により経済事情、法律、貿易、農林畜産業、医療事情、電気通信、港湾建設、メコン河開発計画など経済技術協力事業についての調査報告書が発行されている。

入手にはかなり時間がかかると思われるが、仏文および英文による文献としてはつぎのようなものがすすめられる。

Andre Migot " Les Khmer " Livre Contemporain Paris
Jean Delvert " Le Paysan Cambodgien " Mouton & Co. Paris
David Steinberg " Cambodia: its people, its society, its
culture " HRAF Press New Haven
Martin F. Merz " A Short History of Cambodia " Atlantic
Books London
Bernard Groslier and Jacques Arthaud " Angkor Art and
Civilization " Thames and Hudson London

